

914. 6-S036-7ウ

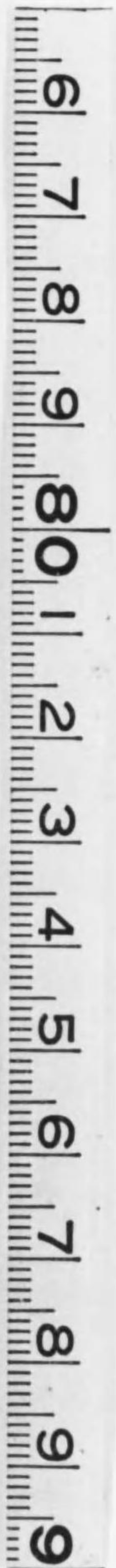


1200500758240

4.6

36

7



始



914.6

50.36

7



緒言

本書は昨昭和十四年の夏から、今十五年の夏までに書き溜めた私の感想隨筆の殆ど全部である。

私がかかり永い年月の東京生活に見切りをつけて、家族と共にこの越後の西隅の邊土に歸住してから、いつしか二十五年の歳月が過ぎ去つた。

その二十五年の間に、私は東京へは僅に二度しか行かなかつた。その二回も大正七年までのことで、その後の二十三年間私はたゞの一度も都の土を踏まずに過ぎて來た。

何といふ執拗な郷土粘着者であることぞ——時にわれながらかく憫笑を禁じ

得ないほどの私である。

今、私が本書を編むに當つて、題するに「邊土に想ふ」を以てしたのも、いさゝかそのやうな特殊な自分の姿を佛彷彿せしめようと思つたからである。

この偉大なる時代に、この輝ける日の本の國に、私のやうな一人の執拗な邊土粘着者があり、何を見、何を聞き、如何に感じ、如何に想ひ、如何に考へてゐるかといふことに一顧を與へてもらふことも、あながち閑事のみにとどまらないであらうと思ひ、敢てこの一巻を世に出すことにした。

(皇紀二千六百年九月末日越後糸魚川の陋屋にて相馬御風記)

目次

小鳥と人間	三
月・星・人間	一〇
斯人を思はう	一五
再び斯人を思はう	二〇
美しき死	二九
奇蹟的武勳	三三
武人の雅懐	四一
時局と農民の心	四四

支那事變二周年の歌	一五〇
彼岸の雨	一五
彼岸すぎ	一三
彼此言	一六
秋日雜記	一七
返り咲き	一六
雪の夜	一〇三
皇紀二千六百年	一〇六
新春良寛を憶ふ	一〇九
正月のたべもの	一一三

銃後佳話三ツ	一一九
新春身邊記	一一五
雪・斷章	一四〇
雪の下より	一四六
梅花と語る	一五三
草雲と文晁	一六一
神の御魂	一六六
神の御子	一六六
橋かけ爺さん	一七一
一杯の蕎麥	一七六

曙覽と笥と風	一八一
手向けの花	一八六
みまつりの春	一九〇
デデツポツチ・アイ	一九三
晩春初夏記	一九四
言葉なき詩	二〇三
國民皆歌人の念願	二〇六
畫人の歌	二〇九
おもひでの一片	二二五
捨てゝ拾ふ	二三五

「坪内逍遙」その他	二三〇
歌集「山小屋」をよみて	二三六
越佐人名辭書に序す	二四一
書のいろく	二四五
法衣に包んだ鑿	二四九
折々の歌	二五五

邊
土
に
想
ふ

小鳥と人間



いつ、どこで、誰から聞いたのか、それとも何かの本で読んだのか、そのやうな記憶は少しもないが、私は次のやうな一つのゆかしい話をおぼえてゐて、時々何かのはずみにそれをおもひ出してはしんみりしたい、氣持になる。

或外國での出來事。貧しい移民の一團が、遠く離れた曠野の未拓地へと出發した。その移民集團の中に、一人の最もみすぼらしい身なりをした二十前後の青年があつた。この青年だけは、着のみ着のまゝで、何一つ生活に必要な所持品とてなかつたにも拘らず、多くの人には名さへ知られない羽毛の美しい、啼く音の微妙な一羽の小鳥を容れた、手製らしい粗末な鳥籠を一つ大切さうに持つてゐた。

出發に際して、この青年はその故で皆の笑ひものとなり、又時には邪魔者ともれ勝ちさであつた。彼は至つて無口で、誰とも話もせず、又少しも他の人の手助けなどしなかつた。そしていかなる場合にも、小鳥を愛撫し、その世話をするにのみ心を奪はれてゐた。

ところが、遠く故郷を離れたこの集團が、いよ／＼空漠たる曠野の目的地に到り着いて文字通り原始的な彼等の生活の第一歩を踏み出してからは、日一日と彼等の生活が無味乾燥となり、その日その日の彼等の心の空虚はつひに醫すべくもなくなつた。

しかし、さうした環境の中にあつても、かの青年のみは、たゞ一羽の小鳥の愛撫によつて、又その歌聲の美しさによつて、又それを恣に樂み得ることによつて、ます／＼幸福であつた。そしてそれ故に彼は曠野の未拓地に於ける彼の勞働にも少しも倦怠を覺えなかつた。

然もその事は彼一人の上へのみとゞまらず、つひには皆の人たちをも彼及び彼の愛する小鳥を中心に集まらせるやうになり、皆の心をうるほはす滋味の泉は、いつしか彼によつ

てのみ求められるやうになつた。

永年私が忘れ得ずにある一つの話といふのはザツと以上の如くであるが、一昨年支那事變が始まつてからあまり多く日數のたゝない頃のこと、たしか吉川英治氏であつたとおもふが、或新聞へ寄せられた戦線報告の中で、空爆下に脅かされてゐる天津（？）市街の路上に、一人の苦力カウチが戦争の恐怖なんか忘れ切つてゐるやうに、籠の中の雲雀に餌を與へてゐるのを見て驚いたといふやうな事が書いてあつた。

私はその記事を読んでひどく心を打たれたが、その時にも私はあの移民團と小鳥の話をおもひ出した。そして、それと同時に私は偶然にも、四十年前に私みづから経験した小鳥に關する一つの珍らしい出來事をおもひ出した。

それは、私がまだ中學生であつた頃のこと、夏の眞盛、私の町に大火のあつた時のことであつた。その大火には私の家は焼けなかつたが、親戚知人の家の多くが厄に遭つた。私はその夜海岸の砂濱で、或家の家財の番をさせられてゐた。何百戸かの家財が亂雑に持ち出された中に、多くの人々は半ば死んだやうになつて荷物の番をしてゐたが、そのいく

分岐惨味を帯びた避難光景の中にあつて、やがて東の山の端からほの／＼とした朝の光がさしはじめると、どこからともなくとも朗らかにカナリヤの高鳴く聲を私は聞いた。取り亂された荷物の中に、何人か持ち出した鳥籠の中からであつたらう。

この突如として、曉の光と共に、くた／＼に疲れてゐた私の耳に響いたカナリヤの鳴聲ほど神秘的な小鳥の啼聲を私は曾て聞いたことがなかつた。

私はこゝで更に、昭和十年二月、太平洋に吹きすさぶ風雪の中で遭難沈没した北満丸の全乗組員四十五名を見事救助した某國汽船の船長の、その事に關する談話の一節を、當時の新聞切抜の中から探し出した。

「何も大したことはない。普通のことをしただけだよ。それについても、是非君たちに聞いて貰ひたい話がある。それは北満丸の船長が、沈み行く本船に最後迄止まり、全員救助されたと知るや、徐ろにブリツチから汽笛を吹き、自分の船に最後の別れを告げたこと、或る遭難船員が自分の最も可愛がつてゐたカナリヤをポケットに入れて救助されると直にポケットから取出して、自分と同様に救助されたことを知つてニッコリ笑つたこと

だ。船員として何と嬉しい話ではないか。」

これは昭和十年二月十六日付東京朝日新聞夕刊に掲げられた記事の一節であるが、同じ紙面の今日の問題欄には次のやうな寸評が加へてあつた。

「北満丸遭難船員のポケットから出たカナリヤは、詩を失つた世界の心をも救ふ。」

こんなことを書いてゐるうちに、私は更に又つい先頃讀んだ名譽の隻手畫家前山賢次軍曹の名著「泥濘二百八十里」中の左の一節をおもひ出した。それは北支永定河に於ける敵前渡河を叙した文章の一節である。

『……河底は固いとばかり思つてゐた我々は瞬間愕然とした。入れた足が却々抜けないのだ。右を抜かうとすれば左がグングン泥中へ吸ひ込まれてゆく。それを抜かうと力を入れれば、右が吸ひ込まれてゆく、右左、右左、右左、抜かう／＼とあせればあせる程吸ひ込まれてゆくのだ。敵前最左翼分隊たる我が分隊は、左に開き過ぎたために、渡河點を相當逸れてゐたのである。分隊全員を危地に陥れたといふ責任感が益々私を焦燥させた。私は思ひ切つて、双手を伸して四ん匍ひにならうとした。

そのとき、辻堂の濱邊でよく聴いた、ちんちん千鳥の、親を慕うて鳴くやうな音が頭上でした。私はこんな場合でもこの優しい音色に嬉しくなり、ヘルメットの面をあげて小鳥を瞬間でもよいから見たいものだと思つた。が、首をツト上げかけた途端、聞き覚えのあるヒューツといふ小銃弾が耳を掠め、折角上げかけた首をさつと引込めてガブリと水中に伏せをせねばならなかつた。

「弾だ、低くなれツ。」

と私が反射的に叫んだときには、皆もう伏せをしてゐた。ヘルメットの頭だけが水瓜のやうに泥水の上に浮んでみえた……」

それでもその時の千鳥の啼聲が此の世での聞きをさめとならなかつた前山軍曹の武運を私は今更ながら祝福する。

以上いくつかの話をおもひ合せ、書きつらねて来て、さて私はおもふ。

小鳥と人間との因縁の深さを。

生命と生命との觸れ合ひの微妙さを。

愛の神秘を。

美と詩の偉大さを。

そして小さき生命にこもる自然の力の限りなさを。

月・星・人間

九月八日の東京朝日新聞に「ヒットラーの目醒時計」といふ見出しで戦時下のロンドン
兒の心境を報じた中に、燈火といふ燈火の悉く消しつぶされた闇のロンドン市中を家路へ
辿る人人にとつて、頭上の空に輝く月や星が再び役立つものとなつたといふことが記され
てあつた。

私はこの記事にひどく心をうたれて、戦争そのものよりもさうした西洋の所謂近代的文
化大都市の住民たちの戦争によつて受ける精神的影響について深く考へさせられてゐたの
であつたが、折から海軍にゐる一人の友だからやはりそのことについてしみじみとした
手紙が寄せられたので、私の心は一層そのことの方へ惹きつけられた。

私のともたちからの手紙には次のやうなことが書いてあつた。

「高樓建築櫛比する大ロンドンで、一週間前までは夢にも想像出来なかつた眞暗の街路の
中に立つて、ロンドン兒たちが全然今まで忘れてゐたであらう月や星が、美的といふより
はむしろ生活上の必要から、月や星の光を頼りに仰ぎ歩いてゐるさまを想像することは、
まつたく愉快なことだ。

純ロンドン兒の中には、月や星といふものを觀念的にのみ知つてゐるだけで、實際あの
美しい月や星といふものを見るのは、今度の機會によつて初めての人もあるであらうこと
が想像される。不幸な戦亂の街ロンドンにも、此の事の想像出来ることは、我々人類最大
の幸福でなくてはならぬ。云々」

いかにもその通りであると私も思つた。一方から見ると、かくなつたロンドン住民の生
活上の變化は、所謂文明状態から原始未開の状態へ戻るべく餘儀なくされた不幸な變化の
やうにも考へられやう。しかし他方から見ると、それは寧ろ人類本來の眞の幸福への復歸
であるかのやうに考へられぬでもない。人為施設の頼りなさを痛感し、生命の故郷への愛

慕が期せずして彼等の胸奥に燃え上つた。

彼等はなほ彼等の眞の故郷を忘れなかつた。これまで無視してゐた自然の美しさは、又その慈しみは、歸つて來た彼等をやはり愛撫し抱擁してくれた。そこに彼等の最も新たな幸福が発見されたのであつた。

私はフト私のこどもの一人が、五六歳の頃母につれられて東京に行つて來て、私への土産話の一つとして、

「とうちゃん、東京に星がないよ。」

といつて私を驚かし喜ばせたことをおもひ出した。そのこどもは東京で生れて三歳まで東京で育てられてゐたのであつたが、私の郷里に私と共に歸つてからいつしか星の美しさなどに愛着を持つやうになつてゐたのであつた。

私は更に關東大震災の後、横濱に住んでゐた私の義兄が、横濱市街の焼野原に立つて毎朝仰ぎ見る富士の美しさを、度々讚嘆した便りを寄せたことをも思ひ出した。

その人は大震災前までは（多年外國の文化都市で生活してゐたからか）自然の美しさな

んてものには一かう興味を持たなかつた人であつた。しかも一旦文化的なものゝ何もかもが焼き拂はれた中に立つて生活するやうになるや、突如として彼はそれまで永い間忘れてゐた自然の美を最も貴い心の糧とせざるを得ないやうになつたのである。

今次ヨーロッパの戦亂は、この先いつまで續くか、どんなところまで擴大して行くかわからないが、少くとも彼等が一時なりとも彼等のこれまで最も頼るべきもの、最も喜ばしきものと思つてゐた人爲的文化施設に對する不安を痛感し、これまで忘れてゐた太陽や月や星への信頼をとり戻し、自分たちのこれまでの營みの眞の相すがたと意義こころとを省みる機會を與へられたことに、彼等は先づ感謝すべきであらう。

更に彼等所謂文明國民がいかにか巧緻につくり上げ、いかに深くそれを以て最高眞理と信じてゐたであらう彼等の所謂イデオロギーと雖も、一朝にしてその正體を暴露して見るといかにそれがあふなつかしいものであつたかを自覺したであらうことも、彼等にとつてはありがたき天の啓示であつたことにも彼等は正に感謝すべきであらう。

私たちは又それらの國々と選を異にした日本に生れたありがたさを、此際一段と新らし

く感じ直すべきである。

斯人を思はう

會津若松市に九年間も開業醫として働きつゞけた後、再び母校新潟醫大の研究室に入つて學究的生活にいそしんでゐた私の未見の心友神尾知氏は、研究室から直に應召、軍醫として今なほ中支戦線に必死の勤務をつゞけてゐる。

神尾氏の留守宅は老母堂、夫人、三人の愛兒と、それから齒科醫として一緒に働いてゐた令弟、それだけであつたが、令弟は一ヶ月おくれて砲兵少尉として應召、二ヶ月後には夫人病死、現在は老母堂が三人の孫の子供さんたちとさびしい朝夕を送つてゐる。

神尾氏は、しかし、さうした家庭の不幸にもくづをれず、ますます勇健な奉公をつゞけて居り、その上陣中に於て醫學博士の學位を獲得して人々を驚嘆させた。

神尾氏の武人としての覺悟は益々固く、學徒としての意氣は愈高まるのみであつた。嘗て陣中から私に書を寄せて、

「大戦争毎に醫學が飛躍をなして來た事は世界歴史が證明して居ります。古今未曾有の大戦争に於て必ず時代を劃する立派な業績が現地から現はれることを御期待下さいませ。學問に對して眞劍であることが即ちお國への御奉公であり科學日本の眞價を世界に顯揚することが私たちの使命であると思ひます。云々」

といふやうな大抱負を披瀝して私を感激させたこともあつた。

その神尾氏から最近又々次のやうな貴い心の消息を傳へてくれた。

「……私も實は暫く病床に日を送りましたして漸く今日、ペンをとりました。……中略……」

一時は重態を傳へられ、死の一步手前までのぞいたやうな氣が致しますが、その後は意外にはかどり、七日に退院し明日から出勤の運びになつて居ります。

靜かに考へまするに、自分としては不注意の爲とも、又無理をした爲とも思はれないところに、大いなる神の攝理を感じ苦みの中にも痛さの中にも、常にこの感激を失はず、外

科醫として自らメスの冷たさを體驗し、又短期間ながらも「病む者」の立場に置かれた事が、臨床醫として如何に尊い事であつたか思ふ時、すべては喜びと感謝の中に包まれてしまひます。

擔架に乗つて仰ぎ見る青空に、今更ながら美しさを感じると共に、異郷に病んで初めて一枚のガーゼ、一卷の繻帶にもしみじみ銃後のありがたさを感じました。

——中略——

私の祖先は曾て會津藩の爲に戊辰の役に戦ひ父は日露の役に滿洲の野に戦ひました。今回私たち兄弟がお召しに預りました事は、餘りにも當然すぎる運命でございます。この上は私が一日でも長く、一ときでもよけいに戦地に留つて御奉公さしていたゞくのが、祖先の遺志に添ふ道でもあり、又一家の爲將又子等の爲めにも尊い理の伏せこみとなるのであると思ひます。更に私は科學者として常に學問に對する情熱を感じ、次々と新しい希望に生き得ることは幸福な事でございます。

——後略——

私はこの手紙を讀んでどうしても泣かずにゐられなかつたが、心ある人の誰かこれを読んで感激せずにゐられようかとも思ふのである。

陣中で故郷に於ける愛する妻の計に接した悲みもいはず、母なき子等、その子等を護る年老いた祖母（即ち自分の母）の心根への思ひやりも述べず、ひたむきに奉公への熱誠と學問への熱情とを披瀝し、更に國家の爲め、はた又學問の爲め犠牲となることによつて將來の爲に正しき理の伏せこみたらんとする悲壯な覺悟をさへ希望を以て語つてゐる斯の人の心境の前に、私たちはどうして頭を下げずにゐられようか。

更に自ら病み、自らメスの冷さを體驗し得たことに感謝し、一枚のガーゼ一卷の繻帯のありがたさを痛感し、擔架上に仰ぎ得た天空の美しさを享樂し、すべて感謝の一念を以て自己の運命を甘受してゐる斯の人の宗教的情操の貴さに對して、誰か又敬虔の念を禁じ得るものがあらう。

斯の貴いものはものゝ覺悟、學徒の心構へ、人間的醇情の表現は近來私の讀んだ他の如何なる文章にも見出し得なかつた。私はこの一通の手紙を常に机上に置いて、時々披見して

は自分の心への鞭としてゐる。

なほ自己發病の原因を反省して、不注意の爲とも無理をした爲とも思はれないことに、大いなる神の攝理を感じ、試練の貴さをありがたがつてゐるところなど、さすがにと心うたるゝものがある。

私はこの私にだけの消息をわたくしするに忍びないので、こゝにこれを紹介することにした。

戦闘員たるつはものゝ壯烈な又は醇美な消息はいふまでもなく私たち銃後國民を感激させ奮起せしめるが、とかく蔭にかくれ勝ちなかうした非戦闘員諸士の貴い心の消息にも、私たちは出来るだけ敬虔な心を以て對すべきであると思ふ。

再び斯人を思はう

私は嘗て「斯人を思はう」と題して、出征後二ヶ月にして夫人病死、留守宅には老母堂と三人の愛兒が淋しく暮してゐるといふ一人の軍醫、しかも出征中に論文をまとめて提出して見事醫學博士の學位を得たといふ剛毅な一學徒の私への陣中通信を紹介し、斯人の貴い軍人精神と學徒の心構へと美しい醇情を讃嘆したことがあつた。

その私の尊敬する未見の友神尾知軍醫から、四月三十日發信の長い手紙が今五月十三日久しぶりで届いた。神尾博士の所屬部隊は中支派遣園部部隊である。

神尾君からの今回の手紙も、私を感激措く能はざらしめた。そして前と同様これを私するに忍びないので、直にこれを銃後の人々にはいふまでもなく、前線の諸士にも讀んで貰

ふべくこゝに紹介することにした。

これほど力強く、これほど痛切に私の心に響いた立派な心の表現は極めて稀であつたからである。

— 前 文 略 —

前線に於きまはしは常に戦闘が繰りかへされ昨秋の〇〇作戦にひき續いて年末より敵の所謂冬季攻勢にかゝり文字通りの寸暇なき日を送つて参りました。激務の爲めに疲労を感じた夜など「野を歩む者」やその他の先生の御著書に依つて靜かに慰められてきました。茲に病院風景の二三を拾つて近況の御報告に代へたいと存じます。

戦闘が激しくなると毎日戦傷患者が殺到してきます。輸送途中の敵襲を避ける爲めに大てい眞夜中でありませす。自動車の列、百を以て算へる患者、ずらりと並ぶ重症者の擔架、係りの者や衛生兵、看護婦全員が各々部署に就きます。キヤラメルやビスケットを配り重症者には擔架のまゝで牛乳を飲ませます。かくて衛生部員のみざましい活躍によつて傷病者は忽ちにして病室に收容されます。重症者の各受持看護婦は鮮血に染み弾丸に破れ

た軍服を白い病衣に着かへさせ、硝煙に煤けた顔、泥や垢にまみれた手足を洗つてやりま
す。そのうちに炊事から温かい御飯が運ばれてきます。久しぶりでありつく飯の味には、
前線からの人でなければわからないものがあると思ひます。手のないものや目の見えな
いものには食物を口まで入れなければなりません。私の病室は殆ど全部が頭部の戦傷であ
りますので、手足のきかないもの、口のきけないもの、さては意識が溷濁して大小便を失禁
するもの等々、その看護も並大ていではありません。ひと通り身のまはりの世話が終ると
夜が明けてしまふことがあります。又出血するものや、その他急を要するものには夜通し
に手術をやることもあります。大失血の爲めに死に漸した患者が衛生兵や看護婦からの輸
血で生きかへつてくれます。敵のチェッコ機銃で頭蓋骨が粉碎し弾片もろともに數十個
の骨片が大脳深く嵌入した患者で、手術後その場でものが言へるやうになり、思はず手
とり合つて感涙にむせぶといふやうな劇的な場面もあります。

又ある時は看護婦に手術の介助をさせ、創内一ぱいにかけてた止血鉗子を持たせておきま
したところ、鉗子をしっかりと握つたまゝふら／＼と倒れかけました。手を離せと言つて

も意識がない。顔面は蒼白となり冷汗淋漓。鉗子をかけてあるのは、切れたら生命にもか
ゝはる大血管であります。何としても手を離させなければならぬ。指も折れよとばかり強
引にとりはなしました。その瞬間私は血まみれの手を押しいたゞき、かぼそき女性の指に
どこからこんな力が出るのであらうかと、倒れた姿に黙禱暫し、何とも言へない崇高な感
に打たれたのであります。連日の激務の爲めに心身の疲勞を來したのでありませうが、「倒
れて後やむ!!」のではない、責任のためには倒れても尙ほはなさぬ此の氣概こそ、戦線に
立つ日本女性の精華であります。是はほんの一例に過ぎませず、勿論恢復致しましたが、
全員皆この意氣を以て日夜傷病兵の看護及治療の爲めに奮闘をつゞけて居ります。

氣候風土の異なる大陸にあつて、あらゆる困苦缺乏と闘ひ乍ら、更に體力的なハンデキ
ヤツプを超えて、献身お國の爲めに働らくこれら女性の勞苦の一端を、銃後衛生勤務にた
づさはる女性にお傳へしたいと思つて居ります。重傷者が入るといつの間にか病室全體の
ベットの配置が變つてゐます。それは比較的治つたものが自ら進んで重症者の隣りに床を
移して看病に當つてくれるのであります。自分も頭に繻帯を巻きながら、傷の痛手を忘れ

て戦友をいたはつてくれるのであります。瘰癧を起したり、うは言をいふたり、又は劇しい頭痛に苦しむものでもあれば、全員一致協力して夜も寝ずに私どもの手助けをしてくれます。人情紙の如き今の世に、見るも美はしいこの情景は戦地ならではみられないものであり、共に弾丸の下を潜つたものみを持つ友情かも知れませんが、願はくはこの互ひの助け合ひの奉仕的精神が、やがて此等の人々に依つて一般社會に移植されるであらうことを心から念じて居ります。

戦場での體驗は理くつではなしに人間道徳を至高なるものにひきあげ、吾々の生活を宗教的なものにまで醇化してくれるのだと思ひます。この美風が今では一つの傳統となり、外來の訪問者が此の病室に入ると、一種特別な景意氣を感ずるとまで言はれるやうになりました。誠にありがたいことでもあります。

お蔭で此の病室から脳外科としての一つの業績が出てゐるのであります。私と致しましてもこれ等の多くの人達の眞實に對しても、將來戦陣醫學の上に何かお役に立つやうなものにまでまとめてゆきたいと日夜努力を致して居ります。昨年來度々その研究成果を、

發表致しましたが、茲にも忘れ得ぬ感激の思ひ出があるので御さいます。多忙の中に期日は切迫する、圖表を書いたり論文の製本等に部下の兵隊が總がかりで手傳つてくれたのであります。遂に最後の晩は徹夜、實は私も徹夜でしたが、自分の部屋でやつて居りましたので、それとは知らず翌朝出勤してみましたら、兵隊はとうとう兵舎にかへらず、病室の片隅にころがつて、うたゝねをしてゐたのでした。時は十二月の下旬であります。豫定の仕事は立派に完了してゐました。私は心の中で合掌し、彼等の眞實に對して感激致しました。

軍隊は決して命令や義務に依つて働くものではありません。一つのものを中心として一致團結してものごとによつつかる此の精神が如何なる難關をも突破するのだと思ひます。極めてさゝやかな論文ではありませんが、その蔭にはこうした多くの兵隊とそして看護婦の純情と眞實の誠とが伏せこめられてあるところにほゝゑましさを感ずるのであります。

數へ舉ぐれば際限ありませんが、斯る感激の生活の中に自己を打ちこみ、學問に生き得る私はたしかに幸福であります。然し天は聊かも私に安如たることを許しません。それ

は母の病氣であります。而も既に命数は限られ、刻一刻と最後のものに近づきつゝあることとあります。

冷徹、至誠を以て全生涯を貫きとほした維新の志士吉田松陰が、斷獄に臨んで惻々として人間恩愛の至情に蘇へり、遂に「親を思ふ……」の一首を遺したのであります。兵隊が戰場に斃れるとき、又は手術臺上で最後の眼を閉づる時「母」を呼びます。呼ぶべき「母」を持つものは幸福であります。學問の爲めとは言ひ乍ら、老いて猶子故に荆棘の道を選び今又吾が子を戰場に送り、最後の脈をもとらせ得ず、寂しく瞑目するかも知れない母の心情を想ふ時、轉斷腸の思ひなきを得ません。有爲轉變極まりなきが人の世の掟でもあります。之もせうが、余りにもそのテンポの急なるに往時を省みてたゞ呆然たるものがあります。之も維新正氣集中の一首「かへり來て草のみわれを知りがほにこぼれかゝれる露のふるさと」はひどく私の胸を打ちます。

然れどもすべては之れ天の命するところ、今や大戦闘を目前にひかへていさゝかの逡巡も許されずたゞ邁進あるのみであります。而してかゝる中にも學徒としての使命を果して

ゆくことが、母へのせめてもの手向け草ともなり、否現在の私に許されたる唯一の孝行の道とも思ひ大いに奮闘する積りで居ります。いつのことかはわかりませんが幸ひにして無事歸還の暁には、是非共先生におめにかゝり色々御指導賜はり度く存じます。

— 後 略 —

私はいく度この手紙を読みかへしたかわからない。そしてそのたびに私の心は異常な静かな亢奮に高められた。これは單なる陣中通信ではない。正にこれ日本國民全體に向つての熱誠燃ゆるが如き叫びである。

私は敢て手紙の主の許しをも待たずに、この鮮血の文字を筆者に代つて世に送ることにした。

終に臨んで私は神尾軍醫その人の武運長久を祈ると共に、男子の二人を戰場に送り、一人の嫁御を彼の世に送り、三人の愛孫の上を氣遣ひつゝ病み臥したまふ博士母堂の回春を祈り、更に父君を戰場に、母君を彼の世へ送り、今又杖とも柱とも頼む祖母君の病臥に心いたためつゝある博士の愛兒三君の安らげく健けく強く雄々しき成長を祈つて止まない。

スメラミクニのクニタミのヤマトココロの尊さの前に、私は今熱涙にぬれてひれ伏す外はないのである。

美しき死

北京の多田將軍から私への近信に次のやうなことが書いてあつた。

「茲にうれしき事一つ報告申上候。それは先日蒙古の包頭に参りし時、宿の女中との會談の折、先月敵軍の一部包頭城内に侵入せし折、女達は萬一の場合を願慮して領事館の中に避難せしが、皆一番良き着物、又は紋付の晴着をなし、中には剃刀を持つて居つた人もありましたとの事を聞き、日本人の心の奥底には日本の魂を保有し居り、よき指導者あらば發揚せらるゝものなることを感じ入りたる次第に候。」

いかにも武將らしく無造作に語られたこの話は、それが淡々乎と語られてゐるだけ、一層痛切な感銘を私に與へたのであつた。

いざといふ場合に於ける日本女性のかうした美しい覺悟は、又その覺悟の根本をなしてゐる魂はまことに貴い。敢て死を望むとはいはない。むしろ死の覺悟によつて生の緊張を極度に高めようとする。そこに生に對する日本人の最後の心構へがある。

しかも、時として日本人には、美しく死ぬといふことに、生の最後の歡喜を求める傾きさへもある。いたづらに生を欲して見苦しく立ち騒ぎ、逃げ惑ふことの代りに、寧ろ美しき死を覺悟することによつて、生の最後の、そして極度の緊張を得ようとする。そしてそこに澄み切つた魂の静けさを確保しようとする。私は日本人のかうした心境に尊さを感じざるを得ない。

嘗て私は、日本の兵隊さんたちが、いかに禁じられても眞下飛泉作の「戦友」と題する日露戦争當時天下を風靡したあの哀調を帯びた軍歌をうたひたがる、そのことについて論じたことがあつたが、その時にも私は悲哀によつて淨化された魂の静けさ、死の洗禮を受けた魂の絶對化、そこから湧き起る眼中無敵の勇氣こそ眞の日本人の勇氣であるといふやうなことを述べた。

ところが、今事變に於ては、古い戦友の歌はうたはれなかつたが、それにも負けず征く者にも送る者にも最も多くうたはれたのは、そして今もなほ前線に銃後に盛にうたはれてゐるのは、かの新らしい「露營の歌」である。

この「露營の歌」は全篇僅に五章の短い歌であるにも拘らず、驚く勿れ、その中に「死」といふ字が三つあり、命を捨てるといふ意味の語が二つあり、五章いづれも死を暗示してゐるのである。即ち次の如くである。

- 手柄たてずに死なれよか (第一章)
- 明日の命を誰か知る (第二章)
- 死んで還れと勵まされ (第三章)
- 笑つて死んだ戦友が (第四章)
- なんの命が惜しからう (第五章)

考へやうによつては、戦に赴く者のうたふ歌としても、またそれを送る者のうたふ歌としても、それはあまりそ縁起でもないといふ云へないこともないであらう。

しかし、事實に於て、その結果は全く反對である。征く者も送る者も共にこの死の觀念の淨化によつて、いやが上にも戦ひに對する勇氣を鼓舞されてゐる。そこに生死の底をぶちぬいた清々しい心境が展開され、大歡喜ともいふべき魂の昂揚さへも與へられるのである。笑つて死地につくとでもいふべき境地であらう。

死を覺悟しつゝ第一禮装までして敵軍の侵入に備へたといふ日本の女性獨特の心境について語られたことが、私をして端なくも以上の如きことまで考へさせて貰つたのは、まことにありがたいことであつた。

奇蹟的武勳

かねて噂に聞いてゐた新木橋の殊勳勇士高木善枝中尉がわざわざ訪ねて来てくれた。

高木中尉は倉林部隊の隊長として中支戦線に出動し、新木橋の激戦に於て殊勳を樹て、名譽の戦傷を負うた勇士である。

その時の武勳を讃へた倉林部隊長の詩に次の如きがある。

悲壯の決意割腹を誓ふ

笑つて齊唱す春日山節

奪取す一擧新木橋

芳名不朽吉田隊。

高木中尉はこの芳名不朽とうたはれた吉田隊麾下の隊長であり、不落と稱せられた新木橋の敵陣地を一舉に奪取した勇猛隊を率ゐたのである。

さてこの詩の中に「笑つて齊唱す」といはれてゐる「春日山節」といふのは、私たちの郷土の英雄上杉謙信を讃ふべく私が十三年前に作った民謡で、中山晋平氏の作曲、藤蔭静枝氏の振付によつて、この地方では弘くうたひもし踊りもしてゐる郷土部隊には最も深い歌の一つである。

・歌詞は

いくさするなら

謙信公のやうな

敵もなさけに

泣くやうな

さうだ、さうだ、さうだ、

その意氣だ、その心意氣。

を以て始まり、

春日山頭

松吹く風に

今も傳うる

義の叫び

さうだ、さうだ、さうだ、

その意氣だ、その心意氣。

に終つてゐる全篇七章から成るもので、作曲は至つて勇壯明快、何人にもうたひ易く出来てゐる。

高木中尉は召集によつて倉林部隊に入り高田市に居るやうになつてから間もなく兵隊たちのうたつてゐる此の歌に心惹かれ、出征前からそれを愛唱し、且部下の兵隊たちと共に熱心にそれを練習しつづけてゐた。そして部下に向つて、

「おい戦地へ行つたら、みんなで盛にこれをうたふんだぞ。死ぬならみんなでこの歌を

「しよにうたつて死なうよ。」

こんなことまで云ひ聞かせてゐたといふことである。

ところが、大陸に着く早々ぶつかつたのが、かの有名な新木橋の難關であつた。敵が自ら難攻不落を誇つてゐたあの陣地、しかもそこに頑張つてゐた敵軍といつたら、それこそ蔣直屬の精銳であつた。

「まつたくあの時の戦争といつたら、そりや大變なものでしたよ。あつちを見てもこつちを見ても、倒れるくく……いやはや、まるで修羅城といつた光景でした。無論私たちの隊もいつしか手も足も出ないといつたやうな窮地に追ひ込まれてしまつたんです。ところで、その時でした、私はもうすっかり覺悟をきめてしまひ、部下に向つて云ひました。

「おい、みんな、うたはうよ、あの春日山節を！」

そして先づ私自身ありつたけの聲を張り上げてやり出しましたね。

いくさするなら

謙信公のやうな

……

すると期せずしてみんなもやり出しました。

私たちは盛にうたひました。うたつてうたつてうたひぬきました。天地はたゞ轟然たる砲銃のとゞろきの中で、私たちはたゞもう夢中にうたひつゞけたのでした。

と、不思議にも、まつたく「不思議にも」です。私たちはつい先刻互に固め合つた死の覺悟なんかいつの間にか吹飛んでしまつて、何だか演習にも出てゐるやうなのんきな氣分になつて居たんです。

そして私には前面に頑張つてゐる敵なんか怖ろしくもなんともない、恰も戦争ごつこの相手なんかのやうに思はれて來たんです。それは私ばかりでなく、後で聞くと兵隊たちもみんなそんな氣持になつてゐたといふことでした。

そんなわけで、私が突撃の號令をかけたのも、一向自分にはたいしたことではなかつたやうに、後から思へるんです。

しかし、それが奇蹟的に成功しました。私が先頭に立つて敵陣に躍り込んだやうに思つてゐましたが、何だか私の外に誰か一人一しよに飛び込んだ者があつたやうな氣もします。

とにかく躍り込みました。夢中でした、夢中でしたが、飛び込んだと思ふ途端に、私はやられました。足にガンと大きな打撃を感じた刹那私はぶつ仆れました。仆れながら彼はそこにはもう誰一人の敵影すらなく、陣地は、全くわが手に歸してゐたことを知りました。

その瞬間私は泣けて／＼しかたありませんでした。私は聲を揚げて泣いたやうに記憶してゐます。夢現の間に輝くが如くひるがへる日章旗を仰ぎながら……」

高木中尉は語り終つてホツと溜息を洩らした。私は息づまるやうに感じ、いつか臉の熱くなつてゐるのを覺えた。やがて中尉は私に向つて、

「私は實はとつくから先生にこのことをお話申上げて、心から御禮を申したく望んでゐたのですが、つい今日までその機會を得ませんでした。まったく私たちのあの時の成

功は先生のお歌のおかげでした。改めて御禮を申し上げます。」

こんな風に云つて丁寧に感謝の意を表するのであつた。

私はそれに對して寧ろ顔を赤らめずにゐられなかつた。

「いや、それはあんまり恐縮過ぎます。私としましては、私のあんな歌が貴方並に貴方の部下の勇士たちのおかげで、そのやうな立派なお役に立て／＼くださったことに對しまして、何とも御禮の申上げやうもないありがたさを感じます。全く光榮の至りです。私の歌はとるに足らぬ歌です。それを生かしてください、そしてそれを立派なお役に立たせてくださいのは貴方です。私にとつてこんな嬉しい、ありがたいことはありません。御禮はむしろこちらからこそ申上げねばならないわけです。」

高木中尉と私との間には、幾たびとなくさうした感激の言葉が取り交はされた。高木中尉は更に歌のおかげであのドタン場に演習氣分になれたこと、その一種異様な超越的氣分が不可能を可能ならしめたこと、そして此の事實が部隊長をして今次事變に於ける特殊事例の一つとして認むべきであると賞讃されたことなどを話した。そして話はおのつから詩

や音楽と戦争といふ方面にまで及んだ。

それから間もなく高木中尉は召集解除になつて歸國した。私は特に中尉の爲に春日山節の全歌詞を額面にしたゝめて贈つた。

私は今日まで幾百篇うたふ爲の歌を作つたかも知れぬが、この春日山節の上に與へられた榮譽ほどの榮譽を受けたことは幾たびもなかつた。

この感銘はおそらく一生涯私の心から消えないであらう。

武人の雅懷

つい先頃北支方面最高指指官の責任を負うて北京入りをした多田中將から第一信が、十月に入つて間もなく届いた。

この一丈四五尺もの長い手紙を將軍が毛筆を以て書いたのはその日の夕刻近い午後であつたらしい。折から仲秋名月の當日であつたが、將軍は雲多くして今夜の月は眺め得ないであらうと書き、明年この夜の月はどこで眺むることやらとも書いてあつた。

心身ともに多忙などといふやうな言葉では到底いひ現はせないやうな緊張裡にあつて、なほ且名月に思を寄するほどの寛量と雅懷を持つてゐる多田將軍の如きは、まことに醇乎たる日本武將の好典型であると、つくづく私は感心した。

そればかりでなく、將軍からの長い手紙の中には、うすくれなゐの色も鮮やかな海棠の花一枝が封じこめられてゐた。そして昨今は北京での最好季節であるが、これは又何としたことぞ、官邸の庭には陽春の櫻花のそれの如くの返り咲きの海棠の花が満樹満開のらんまんさを呈してゐるといふゆかしくもうれしい消息が書き添へられてゐた。

ます／＼以てなつかしい武將の心境である。

陣中矛を横へて明月に雄圖を吟じ、懐郷の思を詠じたその昔の武將、遠征の途上道もせに散る山櫻花に心を寄せ、馬蹄を踏ませ迷うたそのかみの名將、古來わが國の武人にその例枚舉に追がない。

私は嘗てエレン・ケイ女史の書いたものゝ中で、往年北清事變に際し支那に集つた諸國の兵隊の中で、戦中なほ野に咲く花を愛する心を持つてゐたのは粗末な米の飯を食つてゐる日本の兵士だけであつたと賞讃してゐたのを読んで「これなるかな！」と膝を打つて喜んだことがあつたが、今日のあたり多田將軍の北京だよりに接して、一層その感を新たにしたことであつた。

這般の日支事變始まつてこのかた、私はいかに多くの兵士たちから或は大別山中に咲く野菊の花を封じこめた、或は江南の野に咲く桃の花片を封筒一ぱいに封入した、さては中支の廣野の畑の麥の穂や北支山村の綿の花を封じ込めた手紙を受け取つたことであらう。すべてそれら日本武人の雅懐こそ、やがては世界の曠野に開くべき大和民族の精華であらねばならぬ。

戦争の結末は現實主義だけで片附くものとは思はれない。戦ひはやがて合流であり融和であらねばならぬと信ずる私たちは、それ故にこそ前述べたやうな武人の雅懐を貴しとする。

世界の眞の平和は單なる外交上の取極めだけによつてもち來されるものではなからう。考ふべきである。

時局と農民のこゝろ

昨年凶作であつた地方は別として、全国の農村はどこも最近財政的に恵まれてゐると見てよからう。就中全國一の兵站地とまで大きく見られてゐる新潟縣の如きは、新聞の報ずるところによると、米を賣つた金だけでも一億二千萬圓の巨額が農村に轉がり込んでゐるといふことである。無論それは農家の飯米を差引いた上の計算である。

米だけで既にその通りであるが、その他の農産品、例へば木炭、材木、蔬菜類、藁工品、繭、兎毛皮等々を計上すると、これらも大變な増額であり、且出稼人約十萬の持ち歸つた金額も驚くべき増額を示してゐる。

聖戦出征者の數もかなり多く、その爲各農村勞力不足の惱みはありながらも、あらゆる

農産物が産額を増してゐる上に、物價騰貴に伴ふすべての物の價格の増大によつて、収入の激増を示してゐることは、農村の爲まことに力強く感ぜざるを得ない。

かくて

「銃後の第一線を護るものとしての農家が、勞力、畜力、および幾多の物質の不足にかゝはらず、より重大な任務を完全に遂行し、國民生活を磐石の基礎に据ゑてゐる點については、全國民は深い感謝の念に満たされてゐる。このことは言葉や文字に表現すると味がなくなくなつてしまふところのものであつて、深く心の底に湛へられる感情である。そしてこの全國民的な感謝は、最も適當なる方法によつて政府の政策として具體化せられねばならぬ。」(四月二十八日大阪毎日新聞社説)

といふやうな輿論の聲も一方に聞こえて來るやうな世の中となつたのである。

そしてこれは從來とかく輕視せられ勝ちであつた農村の爲に一層喜ぶべき現象であることいふまでもない。

しかしながら農村人それ自身はかゝる一時的現象を以て、農村人の社會的地位が眞に向

上されたものであると自惚れることは、極めて輕率でやり、随つてそれは大に危険でさへもある。

農村人はこの非常時局下に於ける自らの非常な緊張と努力との結果今日の非常な生産力の發揮を示すことを得たのであることを深く自覺すればするほど、この際その緊張と努力を末永く持續し強化し行くべき心の基礎を打ち固めなければならぬのである。そしてそれと同時に全國民の農村への關心を、單に一時的現象に終らしめないやうに努めもしなくてはならぬのである。

一時の米不足や炭不足に刺激されて、急に米づくりや炭焼の仕事を重要視し、それ故にこそ農村サマアマと騒ぎ出した輕浮な都會生活者の農村への媚態がまだく眞にアテにならぬものであると同時に、昨今の一時的好況や都會人の媚態から、農村人みづからイイキになつて自惚れたり、又現在のフトコログアヒをアテにして都會人マガヒのゼニヅカビをやり出したりすることは、それこそ愚の骨頂であり、且ゆるすべからざる非國民的行動である。

農村は造り出すところであり、蓄ふべきところである。物も力も心も、善きはすべて農村に於てこそつくり出され且蓄へられなければならない。米をつくる、炭を焼く、すべてこれらの仕事は、無論一方に於てわれみづからの生計の爲であるが、しかし他方に於てそれは御國への奉仕であり、萬民の爲の働きである。更にそれは天地自然への報徳であり、自然と人間との融合である。それは時勢の變化に左右されるやうな仕事ではなくして、永遠に亘つて變ることなき自然歸一の神聖なる營みである。

今や農村に於ては、如何なる天産物といへども役に立たぬもの、金にならぬものはなくなつた。あらゆるものが役に立ち、随て何でも彼でもお金になる。しかし、さうだからといつて人々は、何もかも自然からもぎ取り奪ひ取つてそれを使ふにまかせてゐてはならない。それは人間にとつてはいゝことであるが、天地自然に對しては此上なく相濟まぬことである。

そしてそれはいつかは天地自然からの報ひをうけ、怖ろしい天罰を蒙らなければならな

現在繁茂してゐる樹木には際限がある。見るかげもない小草のはてまでも同様である。伐り取り、刈り取ることにのみ急で、播くこと、植ゑること、育てること、繁殖させることを忘れてゐると、いつかは救はれ難い天罰を蒙らなければならぬ。

農村は今目前の利を得るだけの仕事に偏し勝ちになりさうな重大な危機に面してゐる。注ぎ込むだけで遠い將來の爲の營みの伴はない收穫ほど農村にとつて怖ろしいことはなし。

時局下農村人の心は、何よりも先づ此の一點に反省の焦點を置かねばならぬ。それは單に經濟的の問題でなくして、對天地自然の精神的問題である。

全國民の農村への關心も、單に現在物を得る營みにのみ集注されることなく、その反面に現在はずき込んだ、けであるが遠い將來の爲に、未來永遠の爲に農村のなさねばならぬ働きへの協力であらねばならぬ。

木を伐ることや炭を焼くことは同時に木お植ゑること、木を育てることであらねばならぬ。田畑の收穫を増すことは、同時に前以上に土地を肥やすことであらねばならぬ。これ

は國家百年の爲であり、天地自然への報徳である、全國民の農村への感謝は、この農村永遠の營みへの協力として實現されねばならぬと共に、農村人みづからもこの營みを一層強化しなくてはならぬ。

私は今にして一層痛切に農村人の心に報恩心の強化深化の必要を認めるものである。

(昭和十五年五月六日)

支那事變二周年の歌

一

聖戰二十四箇月

七月七日おもひでの
輝く朝は明けんとす
同胞一億聲あげて
興亞の光讚へすや。

二

聖戰二十四箇月

今ぞわれらが膺懲の
眞目標は白日に
その正體を現はしぬ
決意新たにいざ起たん。

三

聖戰二十四箇月

ああ、ますらをの血に染めし
支那大陸の野に山に
三たびの夏はめぐり來て
鬼神も夜半を哭くらむを。

四

聖戰二十四箇月

阿片の毒に大陸の

民酔はすべく邪劔もち
白魔侵略なせしより
時も時なり百年目。

五

聖戦二十四箇月
今こそ亞細亞民族が
過去の桎梏を脱却し
拔本以て更生の
大道開く好機なれ。

六

聖戦二十四箇月
犠牲の跡に泣き伏して
戦果の光輝拜めかし

躊躇の寸魔、逡巡の
尺魔斷乎とほふるべし。

七

聖戦二十四箇月
御稜威の光窮みなし
出でて戦ふもののふも
内を護りのくにたみも
一丸以て進むのみ。

八

聖戦二十四箇月
階段更に改まり
第二の扉迫りたり
ああ、その扉破らずば

大道いかで通すべき。

九

聖戦二十四箇月

北魔西鬼も何のその

正義の劍に神宿る

御稜威^{みかづ}は何か遮らん

無畏^{むゐ}の信こそ無敵なれ。

十

聖戦二十四箇月

今こそ見よや天日の

光のもとに聖戦の

まことの意義は明らかし

覺悟新たにいざ往かん。

彼岸の雨

お彼岸入りの二三日前から降り出した冷雨は、彼岸二日目の昨日一日しぶく／＼ながら晴れただけで、又昨夜から降り出して、明日は秋季皇靈祭だといふのに、まだなか／＼止みさうにない。そして病餘籠居の私など、セルに襦袢を重ねてゐてもなほ窓を明けると寒さに堪へないほどの低温である。

何年ぶりの早^{はや}りと猛暑のながい苦しい夏を経て来て、急にかうした冷雨の襲來に逢つた爲か、近來病人の多いこと驚くばかりであると人々は語り合つてゐる。

「暑さ寒さも彼岸まで」といふ俗諺の通り、どんな年でも彼岸を境にして寒さも暑さもめつきりゆるぶのは普通であるが、今年のやうに急激な變化は少々困る。折角刈り入れた稲の乾きの爲にもこの長雨は憂ふべきであらう。

この雨は、氣象通報によると殆ど全国的であるといふが、この地方新潟縣西部にとつてはせめて十日も早かつたら畑作の爲にどんなにありがたかつたか知れないと、農家の人たちはいつてゐる。

それは兎に角、このあたりの農村にとつて一年中最も忙しいのは、春の田植前と、秋の刈入れ時の昨今である。何年ぶりかの大豊作といはれるこの秋の刈入れは、事變の爲の勞力の不足はありながらも、いとも朗らかにいともいき／＼と行はれてゐる。そしてこの豊作の便りこそ、戦地の人々への何よりの歡びをもたらし勵ましとなるであらう。

漁村では彼等自身驚くほどの豊漁つゞきであつた。農村では稲を刈つて見て更に驚くばかりの豊作であつた。このありがたい天地の恵に感謝してゐるこのあたりの豊漁村の光景を、戦線にあるつはものたちは、どんなに快く想像することであらう。

それにしても、昨今のこの農繁期に、一層忙しく狂奔してゐるのは、縣會議員選舉に關與する人々である。農繁期には却て閑散な田舎町ではいさ知らず、昨今の農村では全く政談演説どころではないのである。候補者はじめ辯士たちが勢込んでの演説會も、或部落では僅に三人、或部落では僅に五人、更に甚だしきは僅に一名といったやうな聴衆の集り方では、あまりにそれはたよりないことであらう。しかも奇妙な現象は、候補者の中に政見發表の代りに戦線慰問の報告を以てしたものがあつた、その爲豫想外の大聴衆を集め得たといふことである。

さうした聴衆の集り方が、果して投票の上にとつて影響するかはわからないが、多忙の極にある農村の人々が、政談にはとかく風馬牛になり勝ちであるにも拘らず、わが子、わが兄、わが夫、わが弟等を御國に捧げてゐる戦争の實況談には、仕事を休んでも聴きに集るといふ此の事實は、そも／＼何を私たちに教へてゐるであらうか。

かくいふ私自身も實は二人の男子の一人を召に應じて軍隊に送り、御國に捧げてゐる。しかも彼は今白衣の身を軍病院の寢臺に横へて、相濟まぬ御世話になつてゐるのである。君國に奉公させていたゞくことを無上の光榮と考へてゐることは、以前も今も變りはない。しかし自分の子をつはものとして捧げてゐるとゐないのでは、御國に盡す覺悟は同じであつても、その味がちがふ。

縣會議員選舉に際して、農事多忙の爲にとかく政談を聴きに集ることをおろそかになり勝ちな農村の人々でも、戦線視察談には多少の仕事の支障ぐらゐは犠牲にしても、進んで聴きに集るといふ心情に、私自身深く考へさせられる所以である。

農村でも漁村でも事變によつてすゑん勞力の不足を來してゐるのは事實である。しかも多くの部落に於て、戦死者の遺族や出征者の家族の家の稻刈りが他のどの家よりも早く済んでゐる。國民精神總動員運動が今日の如く具體化されない以前に於て、この現象は既に顯著であつた。勤勞奉仕といふやうな言葉の出來ない前から、既にこの事實は存してゐた。農村に於ける隣保の美俗は、遠い昔から自然に養はれて來てゐた。私たちはこの事實

の前に先づ以て頭を下げずにゐられないのである。

全国的にはどうか知れないが、この地方での農漁村にあつては、いかに文化の程度が低くとも、自分たちの生活に直接影響ある地方行政の諸問題に對して、縣會議員候補者の政見發表會に一部落僅に二三名しか關心を持つ者がないといふほどまでに冷淡である筈がない。而も昨今事實に於てさうであるのは、彼等にはそれよりも以上に切實な要求が存するからであり、それよりも以上に差し迫つてゐる緊急事があるからである。

戦争は人類の不幸な運命であると共に、押へ難き本能でもある。民衆は平時にあつては政争によつてこの本能を幾分たりとも満たさうとする傾もたしかにある。しかし現今のやうに國を擧げて大きな戦争をして居る時にあつては、今やつてゐるやうな縣會議員選舉の投票の争奪戦がどれほどまでに民衆の心を刺激し得るかには頗る疑問である。況んや國民生活の最も大切な標語の一つとして總親和の三字が絶えず宣傳されつゞけてゐるに於てをやである。

最も大切な稻の乾燥期であるこの頃、じめ／＼と冷たい雨が毎日降りつゞいてゐる。お

そらくこの冷たい雨に濡れながらも、この後に來るべき晴天を見越して、又この雨に濡れ伏した稻の穂を案じて、朝暗いうちから夕闇の迫るまで、休むひまもなく稻刈りを急いでゐる人々も多いことであらう。そしてそれらの人々の中には、遠い戦地の子を思ひ夫を思ひ兄弟を思ひつゞ、人知れず涙ぐんでゐる人々もさぞかし少くないであらう。

今も又、私が山國の若い友人から受取つた手紙にこんな一節があつた。

「一昨年今頃は保定の一步前、大河の河岸に猛烈な戦闘をしてゐた時でした。煙草も米も何もかも欠乏してひたすら保定へ保定へと征き進んでゐた頃でした。河岸の夕闇に散つた友達を憶ふとたまらなくなります。内地は秋の彼岸ならむなど思ひながら進んだ時でした。綿の畑の中に腹匍つて、村の秋祭を戀しんだ時でした。云々」

彼もまたそのやうな追憶に耽りつゞ、今は山の村に彼岸の冷雨に濡れながら働いてゐる一人である。

この雨には選挙運動に奔走しつゞある人々も困ることであらうが、田に働く人々は一層困つてゐることであらう。

私は今しみじみとその雨を聴いてゐる。

彼岸過ぎ

「暑さ寒さも彼岸まで」とは昔からいひならはして来たことではあるが、今年の秋はそれがあまり的確すぎた。彼岸前から降り出した冷雨が、殆ど彼岸中降りつづいた後、あまり急激に寒さがやつて来た。

稲刈り盛りのこの連日の冷雨と、急激にやつて来た寒さには、農家の人たちはどんなに苦勞もし、焦慮もしたか知れない。夏の早りがひどかつたので、例年乾燥不十分になり勝ちなこの地方（新潟縣西端）の米は、今年は反對に乾燥が過ぎはしなかつたかといふやうな嘆聲さへ耳にしてゐたのに、大事な稲刈り時になつてほしくもない雨が無暗と降りつづいた。

秋の雨の日に日に降るにあしひきの山田のをちは晩稲刈るらむ

と世人良寛も嘆じたが、その嘆聲は昔も今も變らない。

X

冷たい雨に濡れながら稲刈り急ぐ人々の勞苦と焦慮とは、全く同情に堪へない。折からどこも同じく縣會議員選舉の騒ぎがあつた。

そのことに狂奔してゐた人たちもさぞかし連日の冷雨には困つたであらうが、それ以上に困つたのは稲刈り急ぐ農村の人たちであつたらう。

それでもこのあたりは近年になかつた豊作で、それがせめてもの心強さである。ところが、稲刈りも一段落といふところで、骨休めに鱈汁の熱いのもすゝらうといふ段になるとさてその最も安かるべき鱈すらが昨今は一掛けやすい時で四十錢、高い時は五十錢もといふ途方もない暴騰ぶりである。

このあたりで、寒い時の最も大衆的な美味といへば、先づ鱈汁が擧げられる。

鱈はスケトウ鱈で、それをぶつた切つて味噌汁にして、たらふくすゝり食ふのである。

榮養價の如何はわからぬが、酒の粕でも入れた鱈の味噌汁ほど口にうまく、体内を温める御馳走はさう多くはあるまい。少し大き目の鱈の一掛け雌雄二尾も買はうものなら、五六人の家族全部がその恩恵にありつけるのである。

だが、それも値段が一掛け十五銭か二十銭の頃のこと、昨今のやうに四十銭五十銭といふことになる、それすら容易ならぬことになつたわけである。

X

しかも、漁獲高が減じたのかといふと必ずしもさうでなく、やはり他からの需要が激増した爲、土地での賣買なんか骨折つて居れなくなつたのである。

秋から冬にかけての鱈汁、春から初夏にかけてのナガシ鱈、この二つは何といつても大衆的味の王である。

ナガシ鱈は鹽焼にして食ひ、ぬか漬にして貯へる。ぬか漬鱈はこのあたりではツケドミといつて、鹽強くかたく壓してゐるので、いつまでも腐らない。洗つて酢で食べるもよくそのまゝ焼いて食べるもよく、一年中での最も榮養に富んだ副食物としては、低廉で美味

でこれにまさるものなしとされてゐる。

X

この春から初夏にかけて此の地方のナガシワシの大漁ぶりはすばらしかつた。どの舟もどの舟も毎日二萬尾三萬尾を獲て來た。中には十萬尾も網にかゝつた爲にその重さで舟が沈没したといふ騒ぎさへあつた程でみる。

ナガシワシは大羽鱈のことである。流し網で獲るからナガシワシといふのである。毎朝漸く日の出ようとする頃鱈のかゝつてゐる網を積んだ發動機船が沖から歸つて來る。そして網の目に一尾づつ一面に鱈のさゝれてゐる網が次々に海岸の小石原におろされひろげられる。

その時刻になるとおほぜいの女や子供が集來つて網の目から鱈をぬきとる手傳ひをする。そして其手傳ひ賃として子供も女も各人卅尾、五十尾といふ多量の鱈を毎朝貰つて歸る。朝飯前の仕事としてはまことにいゝ働きである。

X

このナガイワシの大きさは六七寸が普通である。大變な脂で、焼くとジリジリ音がして濛々と煙がたちあがる。あまりうますぎで私なんか一食に二尾以上は到底食べ得ない。花が散つて若葉の色のみづみづしくなり初める頃になると、このナガイワシを焼く臭がどの町にも村にも漂ひ渡る。

しかも、驚くなかれ、このイワシの小賣値段は今年でさへ、十錢に二十尾であつた。それにも拘らず、この土地の人たちは高くなつたと驚いてゐた。

そんなわけで單價は安かつたが、どの船も平均一日百圓以上の収入があり、それが一ヶ月以上つづいた。すばらしい収入といはざるを得ない。

なにしろ此の地方一帯の漁村は今年は大福々である。しかもどの村もかなり多くの出征者があり、出稼人もあつて、その収入を分配される頭数が減少してゐる。懐勘定が一層よくなつてゐるわけである。

なほそればかりでなく、この地方の漁村は大概半漁半農であるから、その點農村と違つていやが上にも豊かなわけである。金だけ握つて物が缺乏してゐるのではなく金も物も共にあるのである。

私は此の地方の爲に喜ぶ。此の非常時にかゝるところもあるといふのは、まことにありがたく、且力強かつたのもしい次第である。

X

しかし、こんなことはいつの年にもあると思ふと大變な間違ひでその點大に警戒を要する。そればかりでなく、毎年やがては三分の二以上も遊んで暮さねばならぬ北國特有のすさまじい永い冬が、さう遠くないところまで迫つて來てゐる。

寒い朝は舟べりに手をたゝきつけて手の凍えしびれるのを防いでまで働かなければならぬ程の苦しい冬がやがて來るのだ。

冬の早く來る北國の農家の秋はあまりに慌しく、彼岸すぎると海の音もめつきり違つて來る日本海岸の漁村の光景はあまりにさびしい。しかもその慌たゞしさのうちに、又そのさびしさのうちに籠る人間の底力は貴い。

新聞や雑誌に都會生活者の視察によつて多く報告されてゐるやうなシミツタレタ農村や

去勢されたやうな漁村の光景ばかりが日本の農漁村の真姿ではない。國民精神總動員運動などの叫ばれない前から、黙々と動員してゐる村はいくらかもある。
この黙々と働いてゐる農山漁村の底力が、オホヤマトの國土を支へてゐるのだ。彼等は口こそ出さね、それを自信してゐる。

彼 此 言

□ 近來流行の「代用品」といふ名稱は私は大嫌ひである。何が何の代用品だなどいはないで、一々それ／＼に新名稱を附けた方がいゝと思ふ。
代用品といふから安つぽくなり、あぶなつかしく感じられるのである。
代用品だといふから不安心を伴ふのである。あまり一つの物にこだはることはよくない。融通無礙であるべきだ。

□ 良寛は一つのスリ鉢で顔を洗ひもし、足を洗ひもし、味噌をすりもし、時に飯を盛りも

したといはれる。

これは併し代用ではない。顔を洗ふ時はそれは洗面器であり、味噌をする時はそれはスリ鉢であり、飯を盛る時はそれはオハチであつた。

あらゆるものをあらゆる場合に應じて活かして使ふことの出来る人には、代用品なんて名稱はあり得ない筈である。

□

戦線の兵隊さん某君から私への手紙の端に

ファンドシを洗つてマスクつくりけり

といふ俳句が書いてあつた。

これはファンドシをマスクの代用としたのではない。ファンドシはファンドシであり、マスクはマスクであつたのだ。

□

「俺には百萬圓の資産がある」と世間に向つて豪語しつゝ生涯清貧に甘んじ通した私の

友人があつた。

彼は、しかし、或時私に向つて云つた「百萬圓は百萬圓だが一生手をつけられない百萬圓でなあ」と。

なるほど、手のつけられない財産なら俺にだつて何千萬圓でもあるぞと私は云つた。

すると彼呵々大笑して曰く、「そんなトテツモもない額だと世間の奴等がマに受けないからなあ。」と。

しかし、さすがの彼も無條件で無一物に安んじ得なかつたところは、良寛さまなど、選を異にしてゐた所以である。

□

人的資源といふ時代語に對し、「人間は資源にあらず靈源なり」と「中央佛教」子は叫んでゐた。

勿論、私たちは、單に仕事をする爲の經濟的資源であるだけでなく、世界無比の皇國民であり、スメラミコトのオホミタカラとあることを、苟くも忘れてはならない。

□
全體と一體との相違をよく辨へて置かなくてはならぬ。

□
世界一周機ニツポンの歸還着陸の實況をマイクを通じて報じた和田アナウンサーの放送は、私の最近讀んだどの詩よりもいき／＼とした印象を私に與へた。

「見えました！ 見えましたポツリと空のあなたに一點！ アツ！ ニツポンです！ ニツポンです！」
から、

「廿五メートルの双翼をびんと張つたニツポンはいよ／＼著陸の姿勢にうつりました。いよ／＼あと百メートル！」

著陸です／＼！ 芝生、々々、人、人、青い空、歡呼、歡呼、おゝニツポンは歸つて來ました。

機翼の下から二つの顔が出て居ります。

青い芝生にが／＼ちりおろす脚です！」
に至る息もつかないほどの名調子、名文句の連続に、私はすっかり酔はされてしまつた。

しかも、それは、二度と同じ感激を以て聽くことの出來ない詩であつた。
一瞬にして消え去る、又それであるが故にこそ貴い詩！ 私はそれを思つた。

□
新聞切抜帳を見てゐるうち、ふとこんな記事が目にとまつた。何新聞にいつ載つたのか不明であるが、あんまり面白いから書き留めて置かう。

後向きに歩く男

彼は云ふ未來に近づくのが恐い

この程ニューヨークで人通りの多い道の真中を肩越に注意を拂ひつゝ後向きになつて歩く男が出現し人氣をよんでゐる。彼はジョン・ボリスジャーといひ最近まで皿洗ひであつたが非常に氣の小さい男で未來に對し大きな恐怖を持つてゐた、ところが何かの間違ひの

ために主人に暇を出され自分の大切な仕事を失ふに至つて未來に對する恐怖は一層深刻となりそれ以來普通の人の様に前を向いて歩いてゐたのでは未來に近づく處があるといふので遂に後ばかり見て歩く決心をしたとのこと

精神鑑定家達はこれは被害妄想狂の一種で彼を元通りにするには何かもう一度大きな精神的打撃を與へるのが一番良いといつてゐる

世間にはこの男ほどでないまでも、うしろ向きに歩いてゐる人間や國はかなり多くあると思ふ。

□

農村部落では各戸に兎を飼ふやうになつた。

兎を飼ふことは、こどもたちにとつては仕事であつて、同時に遊びである。

こどもたちは又兎に與へる爲に、今まで心にも留めなかつた雑草に注意するやうになつた。

こどもたちは兎を愛し、雑草を大切にするやうになつた。

こどもたちにとつては、兎を飼ふことが國策に添ふ功利的な働きであるよりも、先づ彼等自身にとつて楽しい事である。

こどもたちは樂みながら「爲になる」仕事をしてゐる。

兎を飼ふことも、空地に木を植ゑて育てることも、こどもにはみんな楽しいことである。羨ましいことだ。

□

五尺六尺と雪の積つてゐた時は、自分の家の屋根に積つた雪を少しばかり隣家の地面に掘り落すにも、私たちはお互に頭を下げねばならなかつた。中にはそのことによつて隣人同志ひどく争ひ合つた者さへ少くなかつた。

然るに陽春めぐり來つていつとなしに雪が消えてしまふと、各自庭隅の日陰などに消え消つた雪を大切に思ふやうになつた。

早春寒暖常なき頃ともなれば、毎年のやうに悪性の感冒が流行する。さうなるとついこのあひだまで邪魔者扱ひされてゐた雪が、或は氷囊に入れる爲に、或は氷枕に入れる爲に

極めて貴重な物となる。そして埃にまみれた残雪までが大に珍重されるやうになる。

「まことに申し兼ねますが、お宅のお屋敷のどこかに雪が残つてゐませんか。もしございましたら、ホンの少しで結構ですからいたゞかせていたゞきたいものですがね。」
冬うちはホンのシヤベルに一すくひの雪を自分の家の空地に投げたと云つてどなり散らしてゐた意地悪婆さんなんかの口から、時には以上の如き猫撫聲の雪の懇請を受けるやうなことさへある世の中である。

今年四月の初めがいやに暖か過ぎたので、しかも消え方の遅かつた雪がまだ庭隅にかたまり残つてゐた爲に、私たちは魚類を蓄へるに大に助かつた。

「ありがたいな。」

と私たちはつい二三週間前まで邪魔にしてゐた雪に感謝しつつ、眞白な雪を桶に入れてその上に色美しき鱒をのせて置いたりした。

雪國でなくては見られぬであらう美しい景趣であつた。

□

何でも手取早く役立つ世の中となつた。人間も、物も――

しかし、手取早く役立たないやうに見えて、實は未來に非常に役立つべきものの蓄積を忘れてはならない。

役に立つと片ツ端から使つてしまつて、今役に立たないが、五年先き、十年先き、乃至百年先きに役に立つものゝモトを蓄へて置くことを忘れると大變である。

警戒すべきではないか。

□

或師範学校の校長が今春の新人學生に向つて、「諸君はどの方向に向いてもすぐにお金のとれる仕事の山程ある時勢に、特に師範学校のやうな學校を選んでよくまあ來てくれたね。」といつて涙ぐんだといふ話を聞いて、私も涙ぐまされた。

たゞ憂うところは、今から三年なり五年なり十年なり後に新たに小學教員として現れ出る人々に、素質の低下などいふ忌はしい現象のなからんことをである。

現在を目標とする職業の重要さはいふまでもないが、將來を目標とする職業の重要性を

一層重大視しなくてはならない。

□
醫學を脩める者も、臨床醫家ばかりになつてしまつてはそれこそ大變であると同じやうに、あらゆる方面に於て學問の爲に學問をする人の少くなつて行くことを、特に現代に於て私たちは警戒しなくてはならない。

學問に奉仕することは、未來に奉仕することである。

□
良寛和尚は生涯お百姓さんたちを禮拜しつゞけたといふ。

米が不足になつたり、炭が不足になつたりしてはじめて農村の貴さを知つたやうなことをいふ都會人などに逢ふと、私たちは時に腹の中で抑へ難い憤怒さへ覺える。

世の中の人がみんな良寛さまのやうな心を持つといふやうなことは望めないにしても、農村の重要性が、又農業者の働きの貴さが、せめて十年か十五年前から今日の如く痛切に感じられてゐたら、今日どんなにいゝ結果を見ることが出来たであらうかと、私たちは近

來つくづくその事が思はれるのである。

しかし、過ぎ去つた事はいたし方がない。要は將來の問題である。今からでも遅くはない。私たちは今農村に對する、又農村人の生活に對する私たちの心の持ち方を根本から改めなくてはならぬ轉機に立ち至つたのである。そしてそれは單に理論や形式の上からばかりでなく、感情の上からである。

かくて士農工商とならべられたそのかみの日本の社會秩序を再び新らしい眼で回顧することも、決して無駄ではないであらう。

又「造り出すところ」としての農村、そして「蓄へるところ」としての農村の貴い意義をも、「消費するところ」としての都會に生活する人々が、こゝで靜に考へ直すことも、重大事の一つではあるまいか。

日本の田園は、單に生活必需物を造り出し蓄へるところであるばかりでなく、實に日本の心の蓄へられてゐるところであり、健康な力の蓄へられてゐるところであると思ふ。又しかあらしめなくてはならぬと思ふ。

町のこどもたちも、近來休日に山に行くものが激増した。或は松かさを拾ひに、或は落葉を集めに、或はゼンマイやワラビなんかを採りに、彼等はせつせと近い山にやられるやうになつた。

自然を相手の仕事は多くのこどもにとつて、いつしか遊びとなる。最初はいひつけられて山に松かさを拾ひに行つてゐたこどもたちも、いつか自ら進んで行くやうになつた。町のこどもたちが山や野に親しむやうになることは喜ぶべき現象である。況んやそこからさまざまの生活に必要な物資を得て来るに於てをやである。

たゞこゝに留意すべきは、山や野からこどもたちが燃料や食糧を得て来ることを以て、徒らに、自分の働きにのみよる結果だ、と思ひ込ませないやうにすべきことである。

山から松かさを貰つて来る。
野からモチグサを貰つて来る。

この「貰つて来る」といふ氣持をどこまでもこどもたちに持ちつゞけさせねばならぬ。

例へば、落葉を貰ふことによつて木に感謝し、木を尊重し、且愛する——さういつたやうな心も、又こどもたちに持たせつゞけねばならぬ。

更に山や野に藏された限りなき「美」を見出し味ふ心をも、能ふかぎり豊かにこどもたちの内に養つてやることの必要は重大以上に重大である。

□
いろ／＼の新らしい物がつくり出される世の中になつた。

こんなものかと思はれるやうなものまで、工夫一つで立派な役に立てられる世の中になつた。

しかし、これを以て窮して通じた道だとなんか思つてはならない。それは永い間無用の如く見做されて來た智識が、又その集積が、今正に時を得て活躍し、役立つに至つた結果である。

ホンの一寸した發見や發明でも、突嗟の間の思ひつきだけから出来るものではない。

「無用な物」が役立つ時勢に驚き感謝すると共に、私たちは「無用」の如く見える「智」

を尊重することを忘れてはならない。有益な「應用」を讚美すると同時に、私たちは無用に見える「研究」を一層尊重する心を持たねばならぬ。

□

日頃虫喰ひだらけの古本ばかり漁つて讀み耽つてゐた爲、人から變人扱ひされてゐた東京日本橋區の眞中に住んでゐた某といふ人が大正大震災に際して誰よりも敏捷に立ち廻り單に家族一同の命を拾つたばかりでなく、大八車幾臺かに積めるだけ積んで逸早く郊外の安全地帯に運んだ家財の大部分を火難から免れ、その上急速に買ひ集めた、スイトン、ユデアツキの材料のおかげでウンと大利を博した——私は嘗てこのやうな話を聞いた。

日頃間拔扱ひされてゐた彼をさうさせたのは何であつたかといふに、それは安政年代に於ける江戸大震災の記録を面白半分に讀んで暗記してゐたおかげであつた。つまりその死んだ智識が、その場合の彼に生きて働いた結果であつた。

無論彼は昔あつた江戸の大地震のやうな大天災に自ら遭遇しようなどとは夢想だにしてゐなかつた。隨て昔の人の經驗をいつか自分の爲に役立てようなど考へて、彼はふだん

昔の本を讀んでゐたのではなかつた。

しかし、蓄へられた彼の智識は、決して無用にのみ終らなかつた。

何事も目の前の役に立てることの重要さに兎角偏し勝ちな今日の私たちにとつては、この話の如きは正に一大教訓である。

□

久しく氣にかけてゐた北京の周作人氏の近況を四月二十九日付の讀賣新聞で知り得てうれしかつた。氏は今北京大學文學院長の職についてゐるさうであるが、北京西城新街の氏の寓居を訪問した讀賣新聞特派員は、氏の書齋の書架に漱石、鷗外等の著書と共に私の著書もならべられてゐた旨を報じてゐたのは、うれしくもなつかしい次第であつた。

が、それよりもその際の周作人氏の談話中に、次のやうなことのあつたのは一層私の心を衝くものがあつた。

「新政府に望むものといつて私には何もない、たゞ一日も早く教育機關の復活をのぞむものだ——」。

現下の離散した學生や若いインテリ層に一番必要なものは一定の目標をたて、やつて静かに勉強、思索させることだ。これまでの新民會の新民主主義運動、三民主義に對する新民主主義はあまりにも學生インテリ層の勉強時間を奪ひ過ぎた。あだかも神經衰弱の病人のそばで鉦や太鼓をたたくやうなものだ。」

かう語つて周作人氏は更にその點で蔣介石の如きは神經衰弱製造人であるかのやうに云つてゐたと讀賣記者は報じてゐる。

周作人氏のその話を讀んで、私は「さすがに！」の感を禁じ得なかつた。一定の目標を立て、やつて靜かに勉強させろ、靜に思索させろ——その一事を支那の青年學生の爲に特に切望してゐる彼の氣持を察して、私は何となく涙ぐましかつた。

私は嘗て何かに次のやうなことを書いたやうに記憶してゐる。

樹木が大きくなる爲には、幹や枝や葉が外に伸び廣がると共に、ますます土の中深くもぐり込んで行く根の成長がなくてはならぬ。世の中にもこの「根」のやうな人物が無くて

はならぬ。

今日の時勢に於て私は一層痛切にその所謂「根」の如き人物の存在を要望する。

「月明」といふ雑誌で山浦貫一氏の書いてゐたものゝ中に次の一節があつた。

「田舎の方が後れてゐる」かういふ時勢になると、後れてゐることが、どんなに羨やましいであらうかと思つた。」

正直な都會生活者の中には今に至つて腹の底からさういふ嘆聲を禁じ得ない人も少くないであらうと私は思つた。

「田舎は後れてゐる」——しかし、これは都會を本位にしての考である。

田舎を本位にして見ると、都會の方がずるぶん後れてゐる。

進んでゐるとか後れてゐるとかいふ見方はさて置いて、何かにつけて都會と田舎と異つてゐる。又異つてゐるからいゝのである。

それを無理に都會に田舎味を加へようとしたり、田舎に都會味を加へようとしたりすると、却てとんでもない間違を招くのである。

私はむしろ都會はます／＼善い意味での都會化すべく、田舎はます／＼善い意味での田舎化すべきであると考へてゐる。

いづれにしてもナマハンカが最もいけないのではないか。

□

この冬の大雪で庭木はすゐぶんどくいためられた。

そこへ行くと草は丈夫である。殆ど何の害も被らず陽の春光を浴びて新らしき芽を伸ばせるだけ伸してゐる。一時は一丈もの雪の下に壓しつけられてゐた。そして約百日間雪にうづめられてゐた。それでも雪が消えると、すぐに立ち直つて新芽を伸ばしたり、花を咲かせたりしてゐる。

就中最も強いのは雑草である。

秋日雜記

x

越後の西隅のこのあたりの今年の秋は、稀ないゝ秋で、こんなに多く晴天の日に恵まれたことは近年になかった。米の收穫はすばらしく豊かであつた上に、とり入れ仕事もどん／＼はかどつた。豊年といふのはこんな年をいふのであらう。山の雪も、十月一日にはじめて白馬の頭にうつすらと來、同廿一日に妙高、火打、燒山に、之も申譯ほどの初雪が來たゞけで、いづれも僅一二日で消えてしまひ、十月も暮て行かうとする昨日今日、遠山はまだもみちの色を見せてゐる。高山への初雪は、平作よりいづれも半月以上遅れたことになるさうである。

海も今年には豊漁であつた。漁村の人たちもふところが甚だ暖かであるらしい。それにも拘らず私たちの町の如きは他地方への移出激増の結果魚類が不足がちである上に、馬鹿げた高値を呼んでゐる。而もなほ需要は減じないどころか却て増す一方だといふ。好景氣なるかなと驚嘆の外はない。

×

かくて、町のさかなやで呼賣りをして歩く者など殆ど無くなつて、一里も二里も離れた漁村の市場で買った魚類をその土地のさかなやが籠に入れて擔つたり、又リヤカーに乗せたりして来る者が三四人ある位で、それを買ひはぐすと高い店買ひをする外さかなを得る道がなくなつてしまつた。而もぐづぐづしてゐると、漁村から賣りに来る人たちのものが、途中で町の商人に買はれてしまふことになつた。

今朝も、私の家の門前で、私たちの買ひつけてゐる○村の女の行商人を呼びとめて、市場へ買出しに行く途中にあるらしい若い男が自轉車から降りていかにも慣れ切つた調子で、かけひきをやり出した。敏活な男だと思ひながら、私はその顔を見るとそれはあま

りに意外にも、つい二三日前上等兵の軍服姿りしく私のところに歸還の挨拶に來た私の家の買ひつけの魚屋某の次男であつた。

驚いたのは私だけでなく、話しかけられた行商の女も、相手の顔をつくづく眺めて「まあ！」といふやうな表情をした。

「おや、○○のおつさん（弟さん）だねえ。おまん（お前さん）戦地へ行つとんなつたつてがね（行つて居られたといふのに）いつまあ歸つて來なつたね。こりや、まあ、お見それ申して濟まなんだね。——それでもまあお達者で歸んなすて、おめでたうござんした。ながくどうも御苦勞さんだつたねえ。」

さも驚いたらしい女の魚屋は、取引の話なんかそつちのけにして、珍らしさうに相手の顔を眺めながら、先以て丁寧な挨拶をするのであつた。

魚屋○○の次男○○上等兵も買占めに勢ひ込んだ機先を相手の丁寧な挨拶に制せられて、いさゝかたじけぬの形であつた。

私はチラとさうした光景を見たゞけで、すぐに門内に引込んでしまつたが、つい二三日前ながながの出征から凱旋したばかりの斯の青年が、今日はもう何事も無かつたやうな平常の様子で、きびく／＼と家業に働いてゐることから受けた感銘に、やゝ暫く考へさせられたのであつた。

だが、今事變の凱旋兵の歸還後に於けるさうした状態は、この魚屋にのみ見られたのではなく、これまで私の接した殆ど凡ての歸還者に於て同様であつた。

私は嘗て自分が選をした某地方新聞の募集歌中にあつた。

戦痕の痛さに堪へて吾が友は冬の寒さに萱刈にけり

といふ一首にひどく心をうたれたが、今日ではそのやうな光景はいたるところに見得るやうになつた。更に

義手に抱きし藁の束ねの重たさに指のバネく／＼はぐれ伸びたる

この一首に至つては、一層感激的である。

丈夫で歸還たし勇士たちばかりでなくこのやうな傷痕軍人諸士までが、世間からの憐憫をむしろ避けるやうにして常の如く常の營みに従つてゐる。

x

私たちの身邊にも、曲つた片足を引きすりながらも、いとも健げに左官職として働いてゐる人もあれば、手と足のひどい傷痕の痕を物ともせず印刷業に勵んでゐる人もある。

しかもそれらの人々いづれも、決して陰鬱な顔をしたり、同情を人に求めたり、戦功を物語つたりするやうなことはないさゝかもない。皆至つて朗かであり、輕快である。

そもく凱旋して來た人たちが、いさゝかも戦功を誇つたり戦争話に花を咲かせたりしないといふことは、今次事變の最も著しい現象の一つである。

私の記憶するところによると、日露戦争の時はさうではなかつた。滿洲事變の時ですらそれ程ではなかつた。今次事變のこの特異な現象は、たしかに日本國民の非常な成長を示す一つの大きな事實であると思ふ。

それと今一つ私の感嘆措く能はざるところは、今次の戦争ほど多數の勇士たちの文章や

短歌や俳句等の文學的表現の示されたことは曾て無かつたことである。私自身への戦地からの手紙について見ても「よくまあ斯の人がこんないゝ歌や句を詠み得たものだ」と驚かれるほどに、思ひがけない人々からの詩的表現に接することが多い。

一たいこんなにも多くの詩人勇士を持つてゐる國が世界のどこにあるだらうか。更に今一つ戦地からの通信によつて戦ひながらも自己の研究欲の旺盛な各方面の學徒の甚だ多いことを知り得たことの驚きと歡ひを、私は今次事變の特異な現象の一つとして感謝する。且それらの人々のさうした傾向を軍そのものが進んで尊重し助成しつゝあることは、これ又日本の偉大な向上として讚嘆せずにはゐられない。

更に更に私は、歸還勇士の多くが、支那兵のうちにもよきものを認めるだけの寛量を失はなかつたこと、又支那國民に對する人間愛を十分持ちつゞけてゐることに、さすがに聖戦の名にふさはしき勇士たちよと、落涙を禁じ得ないことさへあることを、これ又今次事變によつて示された日本國民性の偉大な顯現として禮拜せずにはゐられないのである。

x

偶々秋晴の街上に目撃した一人の若いさかなやのほんのちよつとした動作が、私にいろいろのことをおもひ起させ、さまざまのことを考へさせてくれたことに感謝する。實はこんなことを書いてゐる私自身も、一人の男の子を軍隊に送り、しかも彼がろくにお役にも立たないうちに白衣の身を軍病院の豪寢に横へて御厄介になつてゐることをまことに濟まなく思つてゐる謂ふところの軍國の父の一人であり、それが又何かにつけて一層感激しがちである所以でもある。(以上十月廿九日記)

x

皓は八月十九日に出發して、翌二十日めでたく入隊させていたゞくことが出來た。

人の子を送りし時は歌ありき吾子に饒けむ歌はあらなくに

大日本は神國也と日の丸の御旗の隅につつしみ書きぬ

國防服着け應召のしるしの襷かけて立ち上りたり皓かこれは

歡送の列の先頭に歩み行くうしろ姿を目より離さず

汽車うごきいでしたまゆらちらと目と目見交はせしのみたゞに旗振りき

x

しかるに何事ぞ！ 入隊後数日ならずして、彼は盲腸炎に胃され〇〇陸軍病院に入院、そのまゝ今日に至つた。これは彼としても残念至極のことであるは勿論であるが、父たる私としても同じく遺憾に堪へない次第である。隊長はじめ隊の諸士から「相馬は入隊した瞬間から實に立派な勤めぶりをつゞけてゐたのだから——」と慰めていたゞいたが、私の心は全く濟まない思で一ばいであつた。

病院に入れていたゞいてから今日に至るまでの軍の大愛には、彼も私も常にたゞ感泣の外なく、再起奉公の日を待つ思の切なることは、彼も私も變りはないのである。

腑甲斐なやと思ひはすれど頑張りだけ頑張りし彼をゆめ疑はず

二十餘貫の巨體よこたへ手術後の絶對安靜にある姿目に見ゆ

再起奉公の日を待つのみと父われにことづてこせし彼いたはらむ

いつまでかつゞく今年の暑さども日に夜におもふ病める巨體を

再起せむ頃はも秋はさやかならむ靜に眠りその日待て皓

しかし、彼は仲秋名月の夜頃になつてもまだ絶對安靜状態を脱することが出来なかつた。

陸軍病院の窓にも月はさしてゐむを仰臥の吾子は電燈や見む

お月見を樂む兵もあるらむを獨臥の吾子は何を見てゐむ

望いちづにあるはよからめ病める身は心遊ばすことも忘るな

聖戦の前途は遠しあせらずに打ちかたむべし心を身を

x

さうかうしてゐるうちに、いつしかすぐ近くの山々まで眞白になり、氷雨に交つて時々霰のふるらしい音も聞えるやうになつた。

皓はまだ病院にお世話になつてゐるが、もう大丈夫といふところまで漕ぎつけさせていたゞいた。

彼の氣持が落ちつくと共に、私の心も平穩になり、ひたすら來るべき佳き日を樂み待つやうになつた。

皇恩に對したてまつり、又多くの方々の温情に對し、彼も私も共に感謝に堪へないと共に、その感激は將來への勇氣をこれまで以上に奮ひ起させるのである。

x

十一月中旬になつて急に寒さがきびしくなつた。

庭には柘榴の實がゑみわかれて紅玉のやうな中の實が濡れた地面に黄色な葉と共に散らばつて居り、薄紅の山茶花が咲き、黄金色のつばきの花が濡れ光る廣葉の群からぬけ出て咲いてゐる。玄關にはあちこちから贈られた大輪の菊の鉢が幾つもならんでゐる。八つ手の白い花も咲きはじめた。

日に日に年の暮が近づきつゝある。

あわたゞしいうちにも、晩秋のわびしさに親しむ静かさがある。

應召の挨拶に来るにも、自分の手で掘つた山薯を持つて来てくれることを忘れなかつた山奥の村の一青年の情味に、私は昨日ホロリとさせられた。

昨日も今日も冷たい雨が降つてゐる。

x

しかし、皇紀二千六百年の夜明を待つ思には、何となしに明るさがある。

おのづから祈りどころが湧く。(以上十一月十六日夜記)

返り咲き

今年、昭和十四年の越後の秋は、不思議なほど晴天に恵まれた秋で、隨て高い山に初雪の來たのも平年より約二週間も遅れ、暖かさも氣味のわるいほどで、十一月も下旬にならうといふのに、老人でさへ拾で暮せる位である。

秋は雨が多いときめてゐるこのあたりの農村の人たちの收穫仕事も、おかげであまり早く片付き過ぎた觀があつた。

それにしても、とりいれ仕事は平年より半月以上早く片付いた上に、ひきつゞき晴天と温暖に恵まれた稀有な好秋を享受してゐる農村の人々の活氣づき加減は、よそ目にも甚だ快いものがある。

ところで時ならず活氣づいてゐるのは人間のみでなく、草木の異變又少からずで、近頃さまざま珍話題を提供してゐる。

私の庭だけについて見ても、枯れたまゝほうつて置いた鉢植の朝顔が、枯れた根元から新芽を出し、小さな蕾が半開のまゝ色を見せてゐる。露草が夏と同じ花を幾莖も咲かせてゐる。茄子が十一月になつてから再び勢を盛り返して、盛に花を咲かせ實をならせてゐる。隣家の庭には、紫陽花が色は赤ちやけてゐるが大きな花を返り咲きさせてゐる。

いつもならばもう雪に見舞はれてゐる筈の山奥の村々で櫻が返り咲きして人々を驚かしてゐると聞いたかと思ふと、或家の畑では茗荷の子が伸び出て花を咲かせたとか、菖蒲が咲いたとか、鉢の春蘭が咲いたとか、まるで夢のやうな話である。

かうなると、九月の末北京からのたよりに、海棠の返り咲きが春の本咲きのやうにらまんたるものがあるとあつたが、十一月になつてのこのあたりの異變はそれどころの騒ぎではないことになる。

日本の秋にも春かへり、支那の秋にも春かへるといふこの異變は、或は大なる瑞兆であ

るかも知れない。無論しかあれかしと祈るもの私ひとりではあるまい。

今日（十一月十九日）も私は袷でも汗ばむほどの暖い日光を浴びながら、家裏の畑に出て土いぢりをしたが、まだいくつもの赤とんぼの飛んでゐるのに驚かされた。泰山木の葉には青蛙がチョココンと乗つてゐた。

來年の夏咲く筈の鐵砲百合の芽が、いつしか二寸餘も伸びて葉をひろげてゐるのに驚きあはて、冬に備へるべく鉢植にした。芍薬の眞赤の芽も既に五六分も土の上に頭を出してゐた。

それでゐて色のいゝ茄子の花が盛に咲いて居り、實もつやつやしいのが幾つもく成つてゐた。枯れくゝになつた石原牡丹（松葉牡丹）までが二つ三つ花を咲かせてゐた。

平年ならばもう二日か三日おきに降るものすごい霰の音をわびしまねばならぬ今頃としては、全く異變以上の異變である。

冬も近いことだと無精にして置いた花壇には、いつの間にかカタバミ草がはびこれるだけにはびこつてゐるのも、そしてそれが黄色の小さな花を無數に咲かせてゐるのも、そのま

ゝほうつて置くわけに行かないほどの若返り陽氣である。

霜枯時の草むしりなどするのは、私には嘗て知らないことであつた。

山もまだ十分食べ物があると見えて、毎年今頃のさびしい庭の何よりの景物であるべき藪鶯の、あの輕快な姿も、今年はまだ一度も見ることが出来ない。

不思議なほど遅い越後の冬ではある。

（十一月十九日）

雪の夜

この冬になつて三度目の雪である。

午前中は炬燵に入つて物を書いてゐたが、時々手が凍えて萬年筆がうまく使へないやうになつた。

夕方になつてこまかい霰がサラサラ音を立て、積つた雪の上に降りしきり、寒さが一層身にこたへたが、風はめつきり穏やかになつた。

「西風に小あられ風の王。」

これは幼い頃からの耳慣れて來たこの地方の俚言であるが、此の分だど明日は風ぐのかも知れないと思ふと、何となく氣持が明るくなつた。

夕食後は靜に本を読んだ。外には自動車の音もしなくなり、人の足音もしなくなつた。風もすっかり止んだらしい。波の音も打つ音と引く音とのけじめがはつきりわかるやうになり、しだいに穩やかになつて行くのが感じられた。

私はふとこの前の冬詠んだ

しんしんと雪ふるよるは戰地なる父に文書く子もあるらむか

といふ自分の歌をおもひ出して、しんみりした氣持になつた。

すると、昨夜來急に寒さがきびしくなつてたうとう雪になり出してからといふもの、何かにつけて頻りに氣になつて仕方のなかつた咄（私の三男）のことが又しても案じられた。

彼は今〇〇陸軍病院に白衣の身を養つてゐるのである。

ついこのあひだも、彼の隊の一士官から、急に寒くなつて戰傷の痕に時々激しい疼痛を覺えて困る、二年を経てなほ然りであるから、病院にゐる相馬はどんなだらうと案じてゐるが、軍務が忙がしい爲近頃見舞にも行けないでゐるといふやうな便りを貰つてホロリとさせられた。

私のこどものは名譽の戦傷ではなくて、病氣の爲の開腹手術の痕であるが、それにしても手術後最初の冬のことゝて、さぞかしその痛みもひどいことであらうなどゝ、いぜん弱氣にならざるを得なかつた。

しかし、軍隊の規律の厳かさと共に、その大愛のいかに寛やかであり、凡ての處置のいかに行届いてゐるかを十分以上に知つてゐる私には、最初から何もかもおまかせ申したといふ安心があるので、時々出る弱氣もすぐに消えて行くのであつた。

いかなる病苦の中にあつても、たゞ一念再起奉公の望に燃えてゐたといふわが子の消息を傳へ聞くにつけても、あんなヤクザな子でさへ……と感激禁じ得なかつたと共に、肅然として大御稜威の前にひれ伏さずにもられなかつた。

今も私の心はいつとはなしにその嚴肅さへと立上らされるのであつた。そしていぜんわが子を御國に捧げてゐる世の多くの親々に向つて合掌せずにもられぬのであつた。

寒さがいくぶんゆるんだのか、屋根から滑り落ちる雪がすさまじい音を立てた。油断してゐてまだ冬圍もしてやらなかつた庭木のことか思はれた。

「こんなに早く雪が来ようとは思はなかつたもんで……。」

これは殆ど毎年冬のはじめに私たちの洩らす嘆聲であるが、しかもその度に私たちは自らの不用意を省み悔むのであつた。

庭にはうすくれなるの山茶花がまだ幾つか咲きおくれた花をつけてゐた。八ツ手も神樂舞の鈴のやうな形をした白い花を咲かせてゐた。

まだ根雪にはなるまいと思ふが、それにしても今からもうこんなに積るやうでは……と、これから先のながい冬が案じられないでもなかつた。

冬ごもりの心構へのまだ十分出来てゐない自分を省みつゝ、私は屋根からなだれ落ちる雪の音に氣を揉んでゐるのであつた。

皇紀二千六百年

皇紀二千六百年のあけぼの、光に向ひ立つらくおもへば
皇紀二千六百年の光浴びてきほひ立つ國の御民なりわれは
皇紀二千六百年を祝ぐべくは大和心の花咲かせ四方に
皇紀二千六百年を迎へたまふ大御心ぞたゞに拜むべき
皇紀二千六百年の日の本の國あればこそ興る亞細亞なれ
皇紀二千六百年を世界擧げて戦ふ時に迎へし思へ
皇紀二千六百年の元旦にも戦ふ兵のあるを思はむ
皇紀二千六百年は大和心の眞實^{まこと}ためさむ年とこそ思へ

元旦

しなさかる越路は雪の輝けばいや鮮けし今朝立つる旗

時感

古ゴム靴につきたる泥を洗ひつつ靴履^{はき}かざりし遠き冬おもふ
日露戦争に召されて征きし兵の草鞋ばきの姿目に見ゆ泣かざらめやも
日露戦争の頃は一枚の附木さへ割りて使ひき今はたいかに
手放しに増大されし欲望が苦^くの最大^{もと}の原因^{ゆゑ}と思へど
物資のみの統制に努め欲望の統制を忘れいかにかはせむ
米不足に苦みてはじめて田園のたふとさを知れりと云ふは誰が子ぞ
喉元を過ぎても熱さ忘れぬやう瑞穂の國の土煎じ飲まな
がつちりと大地踏み立つ農民の無畏の姿は拜めざらめや
日の本の百姓と生れし眞の幸福を皇紀二千六百年にして百姓は知りぬ
働くことに希望^{のぞみ}まともに持ち得たる今の若者の幸^{さい}を讃へむ

働くことに望もち得ざりし過ぎし日の若者たちも若返るべし
大君の御稜威かしこみいかならむ働にも命捧ぐべきなり
かゝる時蓄ふべきは金のみかは物資のみかは文化をも共に
病み悩み惑ひ苦みし後に來る清^{すが}しき心境は個人にのみならず
大時化^{おほしげ}の後に必ず豊漁のあるを知れるは漁師のみかは
智者たちもかゝる時にこそ貯蓄家の如く心の富蓄ふべけれ
いついかなるものがお役に立つか知れず斯く思ふ時し生ける甲斐あり

新春良寛を憶ふ

皇紀二千六百年を迎ふるに當つて、私はそのかみ皇紀二千五百年を迎へた古人たちの心はどうであつたかをおもはずにゐられなかつた。

皇紀二千五百年は天保十一年に當る。その年は蘭學に關する幕府の取締りの嚴重を極めた年で、前年渡邊華山や高野長英が英船渡來の事を論じて罰せられた事などあり、その頃やはり對外問題が國內に紛糾してゐたことがおもひ合はされる。

わが良寛和尚は、惜しいことに、皇紀二千五百年に逢ひ得なかつた。和尚の遷化したのは天保二年、即ち紀元二千四百九十一年の正月六日であつたから、ほんのもう十年のところで二千四百代の人で終つてしまつたわけである。

X

良寛の世を去つた天保二年は、二月外船東蝦夷を侵した事件があり、北地邊境に於ける對外問題のやかましい年であつた。頼山陽の歿したのはその翌年であつた。その後四五年は凶作饑饉つゞきで、國內何となく穩かでなかつた。

良寛和尚は、幸にそのやうな好ましからぬ時勢に逢はずに死んだが、その代り皇紀二千五百年といふ榮ある年を此世で迎へることも出来なかつた。

天が下のどけき春のはじめとて今日を祝はぬ人はあらじな

と曾て親友阿部定珍に宛てた年始狀の終にいかにものび／＼としるした良寛和尚の、皇紀二千五百年の元且の歡びの歌が遺され得なかつたことはまことに遺憾の極みである。

私はもし良寛和尚が皇紀二千五百年を迎へ得て、そしてその歡びを詠じた歌でもあつたとしたら、何よりもその筆蹟か、若くはその歌を他の人の書いたものでも床に掲げて皇紀二千六百年迎春第一の飾りとしたことであつたらう。

X

しかし、前にも云つた通りそれは望んでも得られないことである。私はせめて和尚の日華川上浮の五字を書いた茶がけ幅でも床にかけて、つつましく年を迎へ、靜かに興亞の前途を祈らう。

正月のたべもの

正月の食べものの中で最も親みのあるものは、何といつても三ヶ日のお雑煮である。私は嘗て永く東京に住んでゐたが、毎年正月になるとなつかしく思つたのは故郷の餅であつた。

一昨年暮近くに七十五歳で亡くなつた私の伯父は、人並はぐれた餅好きであつた。毎年一月二日に自分の生家である私の家に年賀に來たが、そのたびに元旦に食べた雑煮餅の数を報告してその年の自分の健康を自ら祝福することを吉例としてゐた。私の記憶してゐる限りでは、伯父は二寸に三寸ほどの大きさの切餅を、元旦毎に十五以上食べなかつたことは一度もなかつた。

亡くなつた年の元旦にも、伯父はたしか十二切れの雑煮餅を食つた。

この伯父は、三十代の頃？ 時々胃痙攣に似た病氣を患つた。そのたびに伯父は餅を食べてなほした。

「しやくが催して來た。餅をついてくれ。」

伯父は持病が催しかけると、さう家人に命ずるのが常であつた。

すると家人は、あわてゝ餅をつく。その杵の音を聞いたゞけで、伯父のシヤクは治まりかけ、やがてつきたての餅を腹一杯食ふときれいさつぱりと胃の痛みが去つた。奇病といへば奇病であつたが、或は餅を食ひたいための神経性の病氣であつたかも知れない。それはモルヒネ中毒者が、モルヒネの氣が無くなるとさまざまの症狀を呈して來るやうな一種の中毒性の疾患であつたかも知れない。

しかし、その伯父の奇病もいつしか治つて、晩年には餅に對する愛着もさまで烈しくはなかつたやうである。

その伯父の長兄に當る私の亡父も、ずるぶん餅好きであつた。やはり正月のお雑煮は毎

年十以上食べた。

その子である私も、實は、正月のお雑煮はよく食べる方だ。六十に近くなつた今でも、かなり大きなのを六切れや七切れは必ず食べる。

此の地方のお雑煮のコは（方言ではグといふ）、普通銀杏の葉形に刻んだ大根、薄く輪切にした里芋、つき蒟蒻、短冊に切つた焼豆腐、芹又は青菜等であるが、私とてもそれらをもたくさん添へたのを、大きな木椀で三杯はやれる。その他り他のおかずなどは無くてもいゝ位である。

神佛への供物をさゝげ、一家揃つて禮拜をすませてから、いよ／＼腰を据ゑて朝祝ひをやるのであるが、折から靜に雪が降つてゝもゐると、そのなごやかさは一層豊かな味はひを伴ふのである。

私の住んでゐる糸魚川町は、米の國といはれる越後の西の隅つこの山と海との間の川沿の狭い平地であるが、産額は少くても餅米の質が甚だ佳く、その味又格別である。私は故郷に退住してから、正月毎に餅はうまいなあと思ふ。

この邊では、一番御馳走をするのは、正月よりも十二月三十一日（大晦日）の夜のお年取りである。この夜宴ほど楽しい行事はこの邊の人々にとつては一年中他にない。

ずつと以前は、お年取りの御馳走の第一は鱈の刺身、焼肴であつたが、近年は高價な鱈なんか食べ得る者は殆どなくなつた。

「お年取り」の鱈は昔から、隣國越中か、能登半島から來たものであるが、近年はそれに代うるに北海道から來る鹽鮭などを以てしてゐる。

お正月のおかずは數の子、ごまめ鱈、きんぴら牛蒡などが普通である。昔はあつた黒豆の煮豆なんかも近年は見られなくなつた。輪切大根、牛蒡、結び昆布、漬蕨、焼豆腐、蒟蒻、里芋、漬蕨などの煮しめも多くの家でつくるやうである。

アベカハ餅もいゝものである。この邊ではアベカハ餅を「吹雪餅」と呼んでゐるところに一層味はひが深い。

どういふわけでアベカハ餅を吹雪餅と呼ぶやうになつたかは確實には知り得ないが、おそらくそれは砂糖汁で濡らした餅にキナコをまぶしつけるのが恰も吹雪の中を行く人の全

身雪まぶれになるのに似てゐるからであらう。

戸外に吹雪がうづまき、人の足音どころか犬の啼聲さへ聞えないやうなしんとした寒い夜、一家爐邊に集り吹雪餅のあたゝかなのを食べ楽しむやうな静かな喜びは、雪國人でなくては味はふことの出来ないところであらう。

私たちがこどもの頃には雪中小學校に通ふ時など、お晝のお辨當の代りに、家を出がけに焼きたての熱い餅を紙に包んで懐に入れて行つた。これは餅を冷やして堅くしないためであると共に、わが身を暖める爲であつた。焼いた餅で體をあたゝめるのは、懷爐を抱くよりも遙に氣持のいゝことであつた。が今のこどもはもうそんなことはしなくなつたやうである。

祝ひ日でない限り、このあたりでは、冬中朝の味噌汁は漬菜汁である。漬菜を細かく刻んだのを掌で握つて水分を流してしまひ、それを落し味噌汁の煮え立つた中に入れてかきまはして食べるのである。この漬菜汁の味は格別で、冬中毎日食べてゐても飽きることはない。

これは正月に限つたことでなく、生の野菜を得ることの出来なかつた昔の雪國人の習慣が今に傳はつてゐるのであるが、それが今日なほ私たちの味覺をそゝるのは、やはりその獨特の味があるからであらう。

以前、この漬菜汁には、大概の家で酒の滓を入れたものであるが、今日ではそれは大變な贅澤となつてしまひ、殆どそれをするものがなくなつた。

冬とれる魚では、スケトウ鱈が最も多く、且つ最も價がやすいので、私たちはそれをぶつた切つて味噌汁にして食べるのを、やはり正月の馳走の一つにしてゐる。

この鱈汁にも昔は酒の滓を入れたものであるが、今はそれをやるのが殆どない。やりたいのであるが、酒の滓なんか到底買へないからである。

山のいものトロロなんか冬ごもりの馳走の一つであるが、この山のいもとて昨今はひどく貴いものとなつてしまひ、容易に手に入らなくなつた。

餅なんかも、來るべき紀元二千六百年の正月には、おそらく氣をゆるして腹一ぱい食べるなんてことは出来ないであらう。餅の米の値段は目下のところ統制外であるとなんて云

ふことは、年の暮あたりにはどこまで高くなるか、今のところ見當がつかないといふことである。困つたものだとしかしこれもやがては何とかなることと思ふ。

(昭和十四十一月廿二日)

銃後佳話三つ

新潟縣刈羽郡中鯖石村字飛岡出身倉林部隊篠崎義高君の留守宅では、五十二歳の老母と三十三歳の妻とが話し合ひの結果、「戦地で働いてゐる人にまけないやうに力の續く限り働かう。」といふ固い決意を以て、自作田六反餘畝歩の耕作に努め、その甲斐あつて反當三石六斗といふ稀有な收穫を得たといふニュースに快哉を叫ばしめられたものは、たゞ一人村農會技術員だけでなかつたこといふまでもない。

しかも、傳へ聞くとところによると、それほどの好成绩を得るのに、人手を借りたのは、春の畦塗りと秋の稻架けとで都合八人半の勤勞奉仕を貰つたゞけで、外は全部母子二人の力でやり了せたといふことである。

更にこれだけの田作りをし、他に相當廣い菜園を耕し、又こどもの世話や何かにも人手を借りなかつた上に、反當り三百五十貫の堆肥までも積めたといふのである。

私は以上の話にむしろ驚嘆させられたのであつたが、更にその老いたる母と中年の妻とはその事を自分たちの力よりも天の恵によるもの大なりと感謝し、且戦地の夫への何よりの慰問たるべきを信じこの吉報を航空郵便を以て知らせてやり、それを無上の歡びとしてゐたと聞いて、私は胸の熱くなるのを禁じ得なかつた。

これこそ謂ふところの「銃後の凱歌」であり、戦線への何よりの聲援であらねばならぬ。わが家に於ける第一の働き手を御國に捧げた後の二人の女手にも、精神の緊張は「村一番の收穫」をさへ得させた。これこそ神ちからと讃ふべきである。

私は、更に、こんな話をも聞いた。それは徐州陥落も間近に迫つてゐた頃のことであつた。

やはり新潟縣の柏崎町松原授産場で出征勇士の若いおかみさんたちが、毎日朝から晩ま

で小さい美しい豆提灯を貼りつけてゐた。

いふまでもなく、それはいともしがたい賃仕事に過ぎなかつた。それぞれ自分の愛する夫を戦線に送つてゐるおかみさんたちには、榮ある皇軍勇士としての自分の夫の目ざましい奮戦ぶりや、その奮戦の結果として、やがて國內の町々村々にあげらるべき徐州陥落萬歳の聲と歡喜の光景とを想像しつゝ、その爲の豆提灯を貼る樂みは、全く比ぶべきものもなかつた。

いつとはなしにこみ上げて來る歡びに糊の手おのづから勇み、「昨夜も寝ずに貼りました」と語る彼女たちには疲労の色さへなく、時には夫よ見たまへとばかり出來上りかけた豆提灯を思はず高くさし上げるやうなこともあつたであらう。

私はこゝにも明朗にして緊張せる銃後の力強さをこよなくたのもしく思はずにゐられなかつた。

ところで、それらとは事變り、私たちの町糸魚川に一人の老石工がある。

この石屋さんは、私なんかより年上で、もうかれこれ六十一二にもなると思ふ。私の記憶するところでは、この石屋さんが近村からこの町に移り住んで来てコツコツやり出してから、かれこれ四十年近くなるやうである。

そのながい年月の間、この石屋さんの造つて来たものは、十中八九まで墓碑であつた。つまりこの人が朝から晩までコツコツ、チンチン音を立て、鑿と金槌で叩きつゞけて造り來つたところのものは、死んだ人間の爲の墓じるしに外ならなかつた。

しかし、彼はいつしかその仕事に慣れ切つてしまひ、いかなる人の墓標を刻まうとも、つひに何等の感傷らしいものすら起らなくなつた。新しい墓の註文を受ける度に、最初の頃は或は「よくもかう次々死ぬ人があるものだ！」ぐらゐは感じたかも知れない。又時には自分も同じ運命に立ちいたるべきを思ひ、「わが墓は如何に……」ぐらゐは考へて見たかも知れない。しかしいつしか彼は、葬式を業とする人々のやうに、又人間の死をあまり多く見過ぎた醫師のやうに、人の死や墓をつくることに對する不感症みたいな心の状態に慣れ切つてゐた。

ところが、日支事變が起つて以來、さすがにこの老石工にも、たゞならぬ感動の日が相次いで訪れた。

どこでもさうであらうが、今度の事變によつて石屋さんたちは、未曾有の繁忙を経験しつゝある。名譽の戦死者の墓碑の註文を受ける度に、わが老石工氏はこれまでに覚えなかつた感激に動かされるのであつた。

私もたび／＼爺さんの仕事場の前を通るのであるが、以前は仕事をしてゐる時の爺さんの顔はいつも呆心に近い無表情を呈してゐたが、近來はどことなくその無心さに深味が加はつて來た。

實は、毎日々々名譽の戦死をとげた勇士たちの墓碑を彫つてゐる此の爺さんの息子さんも、遠い大陸の戦線に働いてゐるのである。

或日、私の知人が爺さんに向つてその事について訊ねたところ、爺さんは次の如く答へたといふことである。

「わしはセガレの死ぬのなんて何とも思ひまへんが、この人たちのやうに立派な働きが

出来るかどうかと、そればかり心配して居ります。正直のところ、わしは名譽の戦死をとげられた勇士のお墓を刻むたんびに、何だか羨ましいやうな、妬ましいやうな氣がしてなりません。これがえらい手柄を立てたおらとこの野郎の墓だつたらなあとそんなやうなとさへ時々思ひますでねえ。」

この話は私の心に豫期しなかつた輝かしいものを感じさせずに措かなかつた。

石も輝く！

それは、先づ、さういつたやうな感じであつた。そして冬日を浴びながら眞白な花崗石の塊の上に乗つかつて、満身の力をこめた金槌を振り上げてゐる一老石工の胸に漲るものの輝きに對して、私は合掌せずに見られなかつた。

新春身邊記

x

皇紀二千六百年の曙は肅々としておとづれた。

大晦日の晩は、夕方までの目のまはるやうな忙しさとひかへ、全部で僅三人の家の者のさびしいけれどもびやかな「年取り」の晩餐を、神棚と佛壇の禮拜を済ませてから、ゆるく楽しむことが出来た。

陸軍病院にゐる咭への陰膳にも神酒の一杯を注いでやることにした。

町の寺々でつく除夜の鐘を聞いた。

ラヂオのおかげで何百里あなたの宮崎神宮の除夜の鐘をさへ嚴かな心で聞くことが出

來、やがて皇紀二千六百年を報ずる樞原神宮の大太鼓をも肅然として聞くことを得た。その瞬間私たちは起立して、先づ宮城を遙拜し、更に樞原神宮を遙拜した。この間の嚴肅な気分は、おそらくいつまでも忘れることが出来ないであらう。かくて皇紀は正に二千六百年となつた。そして私は人生の第五十八春を迎へさせて貰つた。

X

時局柄でもあり、且唯一人の伯母が亡くなつてから間もないことでもあるので、私は今年もまた年賀を遠慮させて貰つた。

おもへば支那事變が勃發してからこの方、一年として近親に不幸のない年はなかつた。時局柄とはいひながら、三年も續いて年賀を欠禮したやうな経験は會てなかつた。

さびしいやうでもあり、何となく濟まないやうな氣もするが、またこのまゝでいゝやうな氣がしないでもない。願はくは、一月一日同時刻に國民全體が宮城を遙拜することになつて、またそれだけによつて、眞に國民の悉くが年賀の心を一にした満足を得るやうにな

りたいものである。

X

とにかく年賀欠禮のおかげで、いとものどかな初春氣分を味はせて貰つた。床には良寛さまの

日華川上浮

といふ楷書五字の小幅をかけた。この五字の一句、もちつて考へれば時節柄の意味もある。日と華（支那）とが一つの大きな川の流に浮んでゐる。この日と華とを浮べた大河はどこから流れて来てどこへ流れて行くか、考へれば考へるほど果て遠い。

柱の短冊掛には幕末の勤王志士佐久良東雄の「異賊襲來」と題した。

比無き神の御國の大御稜威顯し見せむ時ぞこの時

といふ歌の短冊を、又壁には自筆かどうかわからぬが、加茂眞淵の「吉野路」と題した長歌の大幅をかゝげた。その反歌

もろこしの人に見せばやみ吉野のよしのゝ山の山さくらばな

を人々に読んで貰ひたいからであつた。

花は郊外農村部落の歌友が持つて来てくれた赤い實の南天と同じく挿花の技に長けた佛家の歌友の持つて来てくれた水仙。佛壇には小松と寒菊とを手向けた。

今年の正月は、年前に三度も雪が降つては消え、消えては降りしたにも拘らず、六日までは暖かすぎるほど暖かな、新春の名にふさはしいうらゝかさであつた。日中は日當りのいゝ部屋に蠅が飛んだり、庭にはさまざまの小鳥が来て鳴いたりした。

雪のない正月は何だか正月らしくなくて……など、勝手なことを云つては見たものゝ、今年の正月のやうにあたりがガヤガヤ賑はずに落着いた氣分で居られるとすれば、やはり雪もなく風も荒れず暖かな正月の方が一層ゆつたりした氣持になれるのであつた。

六日に、私は文子と友人と三人つれ立つて、郊外の神社に詣で、先祖代々の墓にもおまじりをした。まるで三月頃の暖かさで、見渡すかぎりの山々の雪の輝きも、早春の感じであつた。路傍の枯草原にも、春を待つ青草がみづ〜しい色をのぞかせてゐた。川端の猫柳の芽も、今にも皮をぬぎさうにふくらんでゐた。墓所には山茶花が二三輪咲き残つてゐ

た。

しかるに、突拍子もなく、その晩からすさまじい吹雪と嚴寒が襲來し、下旬にはたうとう昭和三年以來の大雪の冬となり變つてしまつた。

x

雪の降りはじめたその日から私は寢込んでしまつた。それは十一月下旬以來歳暮まで押しとほして來た少々無理な働きや心勞からの心身の疲れに堪へられなくなつたからであつた。

その間に二人の珍客が、吹雪の中をはるばる訪ねて見えた。その一人は鶴見の總持寺に勤めてゐる泰全和尚であつた。

泰全和尚は私の最初知つた頃は某地方新聞の記者であつたが、その後洪水の爲に唯一人の母親を家や家財もろとも濁流に吞まれてしまつた大悲劇に遭ひ、それから受けた心の打撃が動機となつて中年突如として薙髮して禪門に入つた人で、私との心交は十數年に亘つて變らず、近年一層深きを増すばかりであつた。

和尚が過去に於て經て來た脩行の道程には、時々私も泣かされたほどのことがあつたが、近來逢ふたびに人間の出來て來たことに感心させられるばかりであつた。

この和尚、今度北京に大きな寺院が建立されるにつき、それに關する重要な任務を帯びて大陸に赴くべく、その暇乞ひにやつて來たのであつた。

この思ひもかけぬ珍客の、しかも雪中の來訪は、夢かとはかり私を喜ばせた。そして疲れた頭ながら、私は現ともなく快談した。

和尚は既に北京に行つてゐる。出發に際して打つた和尚の電信を受取つた時、私は無量の思を籠めて合掌遙に和尚の壯途を祝福したことであつた。

×

第二の珍客は、これこそ全く意外以上に意外の義兄藤田徹君であつた。

一月三十日、積雪はまださう多くなかつたが、寒風家をゆるがし、吹雪渦をまいてゐた日の正午近く、突拍子もなく徹さんは相變らずの朗らかなるがほで私の寢てゐた部屋に入つて來た。期せずして雙方から差し出した手を握り合つた時、二人とも涙ぐまずにもられ

なかつた。

徹さんは私の亡妻の一つ年上の兄で最近郵船箱根丸の船長として活躍してゐるのであつた。大角大將をおのせして動亂渦中のヨーロッパから八十日もの長い航海を無事にし了せて箱根丸が歸つて來たことを私は新聞によつて知つてゐた。そしてその重大任務を帯びた船の般長たる義兄の爲に、私は内心萬歳を高唱したのであつた。

今突如として病み籠つてゐる私の前に現れたのは、その徹さんであつた。私はもう嬉しい以上であつた。

徹さんは今回かなり長い休暇を貰へることになつたので、急に思ひ立つて妹の墓におまゐりしたり、又久々で私に逢つたりする爲に遙々東京から出かけて來てくれたのであつた。

積る話は後のこととして、徹さんは先づ郊外丘上の墓地へと出かけた。私が丈夫であつたら無論一緒に行くのであつたが、残念ながらそれが出來なかつたので、折よく手傳に來てゐてくれた友人に案内役を頼んだ。

稀にだにうからや訪はむふるさとの深雪の底にうづもれむ身か
と生前詠嘆した照子も、雪中なほかくの如くして訪ねてくれる兄のあることを知つたら
以て瞑すべきであらうと私はしみじみ思つた。

×

やがて徹さんは歸つて來た。そして半日申話しつゞけに話し合つた。

徹さんとは九年前の夏、照子の納骨式にわざわざ來てくれた時逢つたぎりであつた。年は私より五つ下の五十三であるが、いかにも時局下の大船長らしい堂々たる健康ぶりを見せてゐた。たゞ双鬢いつしかほのかに白く見えるやうになつてゐるところ、おのづから苦勞のあとを思はせた。

二人の話は、いつしかお互の二十代の昔に歸り、朗らかな笑聲が部屋の空氣を更新した。

夕方徹さんは又吹雪の中を歸つて行つた。

×

ところが、今更ながら人間の運命はわからぬものだをつくつくつたことは、徹さんはあれから間もなく、國際的大問題となつた淺間丸事件の結果、突然その船の新船長として時代の活舞臺に一層鮮やかな姿を現はすやうになつたことであつた。

重大任務を帯びた大航海を無事になし了せて、久しぶりにいくらかのんびり休ませて貰ふことを喜んでゐた徹さんは、旬日ならずして却てより重大な任務を負うて出かけねばならなかつた。

この事は私をよろこばせたと共に、何ともいひやうのない嚴肅な氣持にならせた。

私は早速電報で祝福と聲援とを送つた。

×

日となく夜となく雪は降りつゞいた。一旦起きて仕事をつゞけてゐた私はたうとう又下旬になつて寝てしまつた。猛烈な風雪が日夜の別なく續きに續いた。

積雪はつひに上からも前後左右からも全く家々を埋めつくしてしまつた。家の中は晝夜のわかちなく眞暗になり屋根に積つた雪の重みで、戸も障子も襖も明けたて出來ないとこ

ろが多くなつた。汽車の交通どころか、隣家への往來も杜絶えるほどになつた。危険が刻々に迫るやうに感じられた。

屋根の雪を二回掘り落して貰つた。一度は區の青年團員諸君の奉仕作業によつて、一度は期せずして集つてくれた深切な出入の人々によつて……

屋根の吹き溜りなどは九尺も積つてゐたと聞いて私はゾツとした。

私は心中合掌して人々の厚情に感謝する外なかつた。

x

屋根からのけた雪の爲に、戸外の積雪はつひに家々の屋根より高くなつた。家々は雪に穴を明けて外の世界への通路とした。町に向ふ側との交通の爲に雪のトンネルもあちこちに掘られたと聞いた。

海も荒れに荒れて、一月中出漁の出來た日は僅に二日しかなかつたといふことであつた。

鐵道の交通が杜絶えがちになるにつれて、物資の欠乏も日に日にひしひしと感じられる

やうになつた。雪崩、家潰れなどの慘劇も耳にするやうになつた。

日夜をわかつたぬ鐵道従業員や除雪人夫の必死の奮闘ぶりの話を聞き、夜眠られぬまゝに吹雪の音の底から響いて來るラツセルの汽笛を聞いてゐると、おのづと臉の熱くなることもしばしばあつた。

x

北陸地方の住民が、雪に脅かされ、雪難と闘ふべく必死になつてゐた間に、國家としては内に内閣更迭をはじめとして幾多の大事件があり、外には依然として皇軍の涙ぐましい奮闘が續けられた。

病みこもる見るかげもない私如きでさへ、おのづから心は靜かではかりあり得なかつた。

x

去年の一月も下旬にはかなり積雪が多かつた。そして私は急性肺炎らしい症状で寝てゐた。

今年も氣のせいばかりでなく、毎日發熱を感じた。しかしさうさう無責任にほうつてばかり置けない仕事や用事が積つてゐたので、私はいつしか床の上で炬燵を机に代へるやうになつてゐた。

雪はなほ止まない。そして私の發熱は依然として續いてゐる。春はまだ遠いのである。

白衣脱ぎ

軍服つけて

來し子はや

吹雪にまみれ

來し皓^{あきら}はや

雪深き

(二月三十日)

こしちも今朝は
空はれて
これの佳き日を
ことほぐらしも

(二月十一日)

子とならび
をろがみまつる
ひむがしの
都は光る
雪山のかなた

(同上)

病みこもる
父と子なれど

もたいなや

今日を壽ぐ

幸さいに逢へるかも

(同上)

あめのした

一つのいへと

みいくさは

今日とる銃づいに

心新たならむ

(同上)

x

うれしいことには、漸く熱が下つた。どうぞ此のまゝいゝ方へ向つてくれるやうにと祈つてゐる。

やはりお醫者さんのいふ通り暖くなるまで靜に閉ぢこもつてゐることにしよう。獨で黙

つて本を讀んだり寝たりしてゐるのが何よりの養生であるらしい。

今度こそしぜんに立ち上るまで獨坐觀念に終始するつもりである。

x

また雪だ。

越路の春は遠い。

人との應對が一番疲れるので、私はずつと客を謝してゐる。お醫者さんもそれがいゝと云ふ。

私は朝から晩まで一鉢の白梅と相對して靜に獨とちこもつてゐる。梅は開きさうでなか
く開かない。内に力が満ち極まらなさと蕾はほぐれないのであらう。(二月二十六日)

雪 断 章

雪國のこどもたちは
雪を手づかみにして食べる
木の枝の氷柱つららをもいで
がり／＼かぢる
霰あられが降ると
小さな手のひらを二つ並べて
天からそれをいたゞく
そしてそれを頬張る

雪國のこどもたちは
オヤツの代りに雪を食べる
つららをかぢる
霰あられを頬張る　そして
雪と遊び雪と鬭つてゐる

越後は今年是非常な大雪であつた。もうちき三月だといふのにまだ私のところは軒にとどくほどの積雪がある。その上時々冴え返つては雪が降る。この分だと三月一ぱい地面が見られないかも知れない。

おまけにこの春は梅も櫻もこのあたりではいゝ花が見られまいと人々は今から嘆じてゐる。それは大雪の年には山の小鳥——就中なつか鶯うすがたくさん出て来て、花の芽を食つてしまふからである。この冬もずゐぶんとたくさん鶯がやつて来た。そして盛に花の咲く木の芽をついばんでゐた。

雪の中で美しい小鳥の姿を見たり、その聲を聞いたりするのは、まことにゆかしいこと

であるが、それが花の咲く木の蕾を食ひ荒すのだと聞いては、あはれな中にもいまはしい気がするのであつた。

何もかも雪に埋められた爲山に餌がなくなつて吹雪の中を里に出て来る小鳥はいとしい。しかしそれだからといつて春を待つてゐる櫻の蕾を食ひ荒らさせて平氣でゐるほどの慈悲心を私は持ち得ない。

さうかといつて何か小鳥の餌になるやうなものを撒いてやつたからとて、安心してそれに近づきそれを食べるほど野生の小鳥は人間に馴れてゐないし、又人間を信頼してもゐない。

ついこのあひだも、雪に閉された私の家の臺所の窓の外に、たくさん雀が吹雪に追はれて集つて来てゐた。私たちはそれを憐れに思つて、わざ／＼窓の戸を明けてそこにお米を盆にのせて置いてやつた。

しかし、雀たちは人間のけはひを怖れて、餓ゑてゐながらそれを食はうとしなかつたばかりか、間もなく吹雪の中へ逃げて行つてしまつた。私たちはなさけない氣がした。

ところが、雀たちにやつたそのお米を、いつの間にか鼠どもが出て来てすつかり平らげてしまつた。雪にとさ／＼れると、晝間でも家の中が暗いので、鼠どもは平氣で出て來るのであつた。

かくて餓ゑた雀に對する私たちの憐憫は、その結果に於て、いたづらに鼠賊どもの腹を肥やさせたことになつたしまつた。

x

雪の上ですてられた

蜜柑の皮の美しさ!

ガラス窓を閉ざした

雪の色のわびしさ!

深い雪の上に

一寸ち細く

果知れずつゞいた

人の足跡のなつかしさ！

x

薄墨色の空の下

見渡すかぎり

たゞ白一色の雪

その下に町がある

その中にたくさん人間が住んでゐる

そして雪の底にトンネルをうがつて

訪ひつ訪はれつしてゐる

雪の上を見ればたゞ白一色の野原

しかしその下には

複雑な人間の生活がある

雪の上に又

雪が音もなく降り積る。

x

雪國の人は雪を怖れる。

しかし怖れる以上に親しんでゐる。

雪のない冬を、

雪國の人は好まない。

雪の下より

越後は今、どこもかしこも、おしなべて一丈内外の積雪に蔽はれてゐます。一月の七日から二月の七八日頃まで、毎日毎夜すさまじいあらしと雪と霰とが、吹きつゞき降りしきりました。漁船が沖へ出ることの出来た日は、その間僅かに二日しかなかつたといふだけでも、いかに風雪が烈しかつたかゞわかりませう。汽車の運轉状態も一時はメチャクでした。

民家の離れくになつてゐるところでは、隣家への往來さへ一時は危険な位でした。學校の授業もやむなく休んだ日さへありました。

ですが、總じて雪の多く積るのは、風のない静かな晩でした。一晩に三尺積つた、五尺

積つたといふことのであつたのは、概して風のない死んだやうな静かな夜でした。かういふ晩には、昔から雪鬼が來るなど云つて、外へ出るのを怖れて來ました。むろん訪ねてくる人などありません。家内ちうが大きな爐のまはりを圍んだり、炬燵に集つたりして、ひそやかに語り合ひ、やがて明日を案じながらめい／＼の冷たい寢床にもぐり込むのでした。

私はかうした雪の夜に、とかく出征者の家族の上をおもひやりました。

しんしんと雪ふる夜は戦地なる

父に文書く子もあるらむか

あらしが戸をゆすり、窓に打ちつける吹雪の音のすさまじい時にはそれにまぎれて聞えなかつた波の音が、風がしづまりしん／＼と音もなく雪の降りつもる晩になると、深い雪の底にうづもれてゐる私たちの耳に、すぐ近くの海岸に併せては返し、返しては寄せてゐる波の音が、どこか遠い世界からの音のやうに聞えてくるのでした。

ふか雪にこもりて聞けば波の音

よるはこの世のものとしもなし

屋根の上に積つた雪の嵩があまり多くなるとその重みで戸や障子や襖のあけたてが出来なくなる。さうなると家そのものも危くなつてくる。そこで雪卸しといふことをやらなくてはならぬのです。つまり屋上の雪を掘つて、それを空地の雪の上へ投げ落すのです。しかし空地にも同様雪が高く積つてゐるので、更にその上に屋上の雪を積むと、その高さはつひに屋根よりも高くなり、果は雪おろしでなくて雪上げになつてしまふのです。そしてさうなるともう家は全く雪の中にうづもれ果て、家の中は眞暗になり、晝夜の別もなくなります。

そればかりか外への出入りは、或は二階の窓から穴を穿つたり、戸口から雪に穴を掘り更に地下室からのやうに雪の階段を幾段も上つて外の世界の積雪の上の道へ出たりする外なくなつてしまふのです。

屋根の雪おろしを、一月中に私の家は、二回やりました。一度は私の家も出征者の家族といふわけで、區の青年團がやつてくれました。涙がこぼれる程かたじけないことでし

た。

出征兵の家の屋根雪おとすらし

青年團旗高くひるがへる

しかし節分すぎてから、さすがに寒さもゆるみ、雪の降り方も少くなり、久しく見なかつた青空を見ることが出来、うららかな太陽の光に照らされることも出来るやうになりました。

皇紀二千六百年の紀元節の朝は、一きはうららかに清々しく晴れ渡りました。

日の御旗門邊の雪にさしたてゝ

都の方を拜む今朝かも

道路の雪はまだ家並の軒より高く積つてゐるので軒先に掲げるべき國旗は、しぜん軒より高い雪の上に立てる外ありませんでした。

家々の軒より高く積つた雪の道路の両側にたてならべられて、寒いが清々しい朝風にはためき翻つてゐる國旗の列は、雪の中なればこそ其の日の丸の色も一きは鮮やかに美しく

見えるのでした。

雪ふかき越路も今朝は空はれて

これの佳き日を壽ことほがんとす

そのあくる日も晴でした。そして大屋根の雪の解けて滴る水の音が、いつものどかに聞こえさへもするのです。殊に朝御飯の卓についた時、私は昨日まで眞暗であつた茶の間が急に明るすぎるほど明るくなつてゐるのに、何だかまるで別世界に來たやうな感じがありました。それは冬に備へるべくわざ／＼高いところに明けてあつた窓を埋めてゐた空地の積雪が、隣家の人が外井戸への通路としてゐた雪のトンネルの崩潰によつて急に嵩低くなつたからでした。おかげで私たちは何十日目かで明るい朝の光の中で御飯をいただくことが出来ました。

きさらぎもはやも半ばとなりけり

雪にこもらふ車井くるまゐの音

しかし、越後の雪は餘寒に降ると昔から云ひな居らはしてりますから、まだ／＼安心は

出来ません。

せいぜい二三日の晴に喜んだ後で、私たちは又暗い空と、すさまじいあらしと、雪や霰の渦の中にちよこまつて暮さなくてはならなくなるのでせう。

かくて越路の春は、時たま一寸思はせぶりな笑顔を空からのぞかせて見せては、すぐに又暗い冬のうしろに引込んでしまふのです。

越路に住む私たちはまだこの先一と月も、所によつては二た月以上も、どつかりと腰を据ゑて冬と親んでゐなければならぬのです。

待ち待ちていつしか待たすならむ頃

ほのぼの春はめぐり來くらしも

梅花と語る

北陸は近年稀な大雪であつた。一時はどうなることかと不安な氣持にさへなつた。晝となく夜となく猛烈な吹雪が半月以上もつゞいた。そしてその間ちゆう私は殆ど病みとほした。

皇紀二千六百年の輝かしい紀元節の日が目前に迫つてゐる今日、なほ私は軒より高く積つた雪の底にうづもれて、客を謝し炬燵を擁しつゝ、獨ひそかに病軀を養つた。

閉ぢこめてゐる私の居室には去年もさうであつたやうに、私みづからの手で世話をして來た一鉢の老白梅が、嚴寒の中にあつても生きの力愈々旺盛に、日に日にそのたくさんの蕾をふくらませつゝある。すでに碧玉のやうな中から、白玉のやうな花の色をのぞかせて

ゐる蕾も少くない。

私は晝のほかな雪明りの中で、又夜の明るい電燈の光の中で、孤坐黙然としてこの一株の梅の木と相對してゐる。幾年かの寒暑を、しかも人間の手で或は截られ、或は矯められつゝ過して來たこの老木には、おのづから一種の威容さへ備はつてゐる。それでゐながら依然としてその蕾はやさしく、その花の色も容もすがしく且その薫は高い。私はこの一本の梅樹に對して限りなき愛着を感じる。そして時には生命の交流ともいふべき一種の神祕感をさへ與へられ、自己の生命の昂揚をさへ惠まれた。

ところで、多くの學者たちの教へるところによると、梅といふ木はもとく日本の國土に於ける自生の木でなくて、上代に於て支那大陸から移植されたものであるといふことであるが、それがいつしか大和民族の好尚するところとなり、つひに今日の如く全國土に繁殖し、嚴寒を凌いで咲くその氣魄は恰も日本國民のそのの象徴でもあるかのやうにさへ思はれ、且その實の鹽漬である梅干は、日本國民獨特の貴い食料であると考へられるやうにさへなつた。

梅樹が支那大陸に多く、且それが彼土の人々に昔から愛好されてゐたことは、彼國の文學に於ても極めて明らかである。けれども現代に於ても、支那人は昔ながらにその樹に對し、その花に對して、強い愛着を持つてゐるであらうか。私はその事をくはしく知りたいと思ひながら、疎懶つひに今日までそのことについて確めることなしに過ぎた。

しかし、現代の支那人が梅花を愛しようが愛すまいが、又その木がもともと支那から移植されたものであらうがなからうが、奈良朝このかた千有余年の間われら日本國民が愛しいつくしんで來た梅の木は、花は、又その實は、今は全くわれら日本のものになり切つてゐる。そして支那人が夢想だにし得なかつた梅干といふ獨特な貴重食料をさへ我國に於て創製した。しかも、その梅干をたゞ一粒われらの主要食たる米の飯の丸く握つた中心に入れることによつて、われらはわれらの國旗を直に思ひ起すまでに、それを精神化してゐるのである。

此の事實は甚だ貴い。

越後では野梅の根元になほ三、四尺の雪があるのに、雪の上に高く伸び出てる枝に梢

に、花の満開を見ること少くない。

凜烈たる寒風を凌いで逸早く花を咲かせ香を漂はす梅樹の雄々しさから、越後の人たちはよく郷土の古英雄上杉謙信を聯想して讚美の形容とする。

上杉謙信は詩人的情熱家で、いかにも日本武士らしい武將であつた。義の爲には彼は常に命を賭して戦つた。彼の戦は率直であり、單刀直入的であつた。

しかも彼は敵國の最も窮してゐた鹽を送るに躊躇しなかつたほど人道愛に厚かつた。

この前の歐洲大戰に際してイギリスの一評論家が次のやうな意味のことを叫んだことを私は今更の如くおもひ出した。

「ヨーロッパ人は何故日本のサムライに上杉謙信の如く人道的に戦ふことが出来ないか。

何故ヨーロッパ人はかくも野獸の如き戦を戦はねばならぬ。」

歐洲は今又戦つてゐる。しかも一層野獸的に戦つてゐるらしい。

「何故ヨーロッパ人は日本のサムライに上杉謙信の如く戦ふことが出来ないか私たちは再びかく叫ばずにはゐられないやうな氣がする。」

イギリスやアメリカの人間たちは兎角日本國民を好戰國民視したがる。平和の攪亂者であり、侵入者であり、殺戮者であるが如く、彼等は日本を見よう／＼としてゐる。

しかし、世界正義の爲に、人類道義の爲に日本は銃と劍を以て戦ふ外に、如何なる戦をなし得ようか。

劍を以て戦はねばならぬ戦は、最も率直であり、最も明朗であり、最も正直であり、且最も純粹である。日本の戦ふ戦は、上杉謙信のそれと同じである。これをイギリス人やアメリカ人は暴力的行動であるといつて強ひて貶しようとする。

しかし、私たちの目からは、いたづらに平和の假面に隠れて食糧やその他の生活必需品の道を絶つことによつて、恰も眞綿で頸を締めるやうな、ナブリ殺しを企てゝゐる彼等こそ實に最も惡辣な、最も殘虐な惡魔である。いくさするなら謙信公のやうな敵もなさに泣くやうな

さうだ、さうだ、さうだ その意氣だ、その心意氣

かう嘗て私ばうたつたことがあるが、日本の戦ふ戦では、一方に正義の劍を以てする最

も正直な明朗な戦であると共に、他方に於て謙信のそれのやうな人道愛を以て裏付けてゐる。

中立を宣言してゐる第三國の商船を威嚇したり、爆沈させたり、通商條約を獨りぎめに破棄したり、あらゆる物資輸入の道を絶つたり、妨害したり、ジリジリと國民全體をまで窮死の道に追ひ込まうとするやうな平和の假面を被つた惡魔の冷酷殘忍は到底われら日本國民のなし得るところではない。

これこそ暴力以上の暴力であり殺戮以上の殺戮である。しかも其背後に平和の假面、正義の偽装をした惡魔がニタ／＼と氷の如く冷やかに笑つてゐる。

私たちはそれを想像するだに亢奮せざるを得ないのだ。何故彼等はニッポンのサムラヒ上杉謙信の如く明快率直に而も人道的に戦ひ得ないのか。

支那事變勃發以來今日までに、私は誇張でなく全く堆高い手紙の多數を出征して居る將兵諸士から貰つた。そして其數へる違もないほど多い手紙の中で、如何に多くの人々が支那の良民に深い同情を寄せ温かい同胞愛に泣いてゐるかの事實にぶつかつて、私みづから

もひそかに泣かされて来た。これこそ眞に日本武人の精神である。

それがどうして謂ふところの文明國民たちにはわからないのか。いや、わかってもわざと歪曲してゐるのかも知れない。それはどういふわけなのか。

私は時にこんなことを考へることがある。日本と支那との戦ひが相互の不幸な運命として時に勃發したとしても、若し絶対に文明惡魔たる第三國の入智慧や奸策がなかつたら、戦ひは極めて簡単に、率直に終つたであらうと。

實際、われらの戦ひをしていたづらに長期的にし、いたづらに複雑化し、いたづらに不本意な錯綜を來さしめたのは、すべてイギリス人やアメリカ人の狡智からである。

しかも、彼等は最も平和を愛好し、人道愛に燃えてゐる、正直な日本國民の心をまで自己を以て付度してゐる。そしてその誤れる（或は故意の）付度を理論化して、それを以て日本の現實をまで捏造しようとしてゐる。

その反對に正直な日本は、時に同じく自己を以て彼等を測り、彼等には絶対に通用しないやうな正義論を以て彼等を説得しようとしてゐる。しかし、それこそ彼等の乗するに最

もよき機會を興ふることである。日本の正直はもう世界に通用しないものと、われらは斷乎として決心してもいゝ頃ではなからうか。

こゝで私は一つの實話をおもひ出した。それはずるぶん前のことである。私の學友の一人がアメリカで苦學してゐた。彼はいろ／＼と仕事を變へたが、ひと頃豚のやうに肥満した或金持の後家さんの家に皿洗ひとして雇はれてゐた。

或日のこと、彼は一ダース揃つた皿の一枚をあやまつて破つてしまつた。彼は全く濟まない思ひで、正直に事の真相を明かして謝罪した。日本ならばそれで事が濟み、その正直がむしろ嘉せられさへもする筈である。

然るに、アメリカではさうは行かなかつた。ありとあらゆる侮辱と惡罵とが彼の上に浴せかけられた上に、破れた一枚を辨償することなしには、いかなる謝罪もゆるされなかつた。この仕打は人一倍純眞な彼をして極度に憤激せしめ、残りの十一枚の皿を全部豚夫人の足許の床に叩きつけて粉微塵に破つてしまつた。

かくて彼は狂氣の如く外へ飛び出し、早速財布の底をはたいて破つた皿よりも數等上の

いゝ皿を一ダース買ひ求め、復讐の代りにそれを豚夫人に捧げた。その結果は如何。豚夫人の態度ガラリと一變し、ニコニコ顔でサンキュー、サンキューを連發し、

「お前は不思議なボーイだね。なぜ残りの十一枚も無事にして置かなかつたの。惜しいことをしたのね……わたしにはどうもお前さん達ニッポンの人の物の考へ方がわからない」

一鉢の梅樹と相對しつゝ、稀に吹く風もない静かな夜の一室に病軀をいたはりつゝ、私はつい梅花の上からとんでもない方向へ心を走らせてしまつた。

草雲と文晁

幕末足利藩下にあつて誠心隊と稱する結社を組織し、自ら先頭に立つて勤皇の大義を高唱した熱血の士、明治二十三年十月宮内省に帝室技藝員をおかるゝに當りて拔擢されて、その一員たる光榮に浴した、一代の畫匠田崎草雲の最初の師は谷文晁であつた。

草雲の父は足利藩の足輕で、江戸に住んでゐたが、その暮しはいとも貧しかつた。幼少の頃から畫を好み、學ばずしてその技に秀でた彼は、少年時代すでに畫家として立たうと志し、當時天下一と稱せられた畫家谷文晁の門を叩いて東修を脩めた。

しかし門前市を成すの盛況を呈した文晁の塾では、到底思ふ萬分の一の修業も出來なかつた。

當時の有様を、後年草雲はつぎのやうに、人に語つたといふことである。

「文晁の家へは五、六回往つたが、肥え太つた爺さんで、油紙で軒端に日蔽をかけ、いつもその下で繪をかいてゐた。少し遅く行くと、酒に酔つ拂つてゐて、何しに來たと叱りつけ、てんで繪の話なんか聞くことが出来なかつた。云々」と。

こんな風で、折角入門はしたものの、文晁からはほとんどなにも學ぶことが出来なかつたので、草雲はつひにそこを斷念し、爾來さまざまな苦勞の結果、後年加藤梅翁といふ老畫家の門に入り、梅溪と號して專念繪の修業をつゞけることになつた。

草雲が、その梅翁門下に學んでゐたある年の正月元日のことであつた。

彼はふとしたことから、遠ざかつてゐた舊師谷文晁のことをおもひ出した。そして妙に慕はしくなつかしい思ひがしたので、年賀かたがたふら〜と文晁の門を訪れる氣になつた。

文晁は例によつて大に酔つてゐた。

しかしさすがに一度弟子とした草雲のことを忘れてはゐなかつた。そして快く逢つてく

れた。

そればかりでなく文晁は、草雲がその後、梅の繪で相當有名な梅翁の内弟子となつてゐることを、だれから聞いたかちやんと知つてゐた。

文晁は云つた。

「お前は今梅翁の弟子になつてゐるといふことだが、さそかし梅の繪が書けることだらう。どうだ、ひとつ、拙者の目の前で梅翁仕込みの梅の繪を書いて見ないか」

文晁のこの言葉には草雲はハツとしたが、しかし生來負けぬ氣の彼であつたから、即座にそれに應じて、眞剣に梅の繪をかいて文晁に示した。

草雲のかいたその梅の繪を受取つて一目見るや否や、

「なあんだ、これは。これでも繪か。こんなものを書くのに、お前は大切な手を使つたのか。もつたないことだ。わしなら足で書いても、これよりやりつばに書ける。これでも手で書いたといふのかい。ワツハハハ……」

文晁はかういひざま精根こめて草雲の書いた梅の繪をほうり投げた。そしてサツサと奥

へ入つてしまつた。

草雲はくやしかつた。泣いた。聲をあげて泣いた。文晁に投げ出された自分の繪を、ズタ／＼に引裂いた。

そして掌を握りしめて文晁の後姿を睨んだ。

と、憤激に血走つた草雲の目に、床に祀つてある畫神の前に供へてあつた御酒徳利が映つた。

彼は恭しく神前にすゝみ、誠心こめて禮拜した後、供へてあつた御酒をありつたけ飲み乾した。そして、

「ようし、今に見てゐろ。今に見てゐろ。俺は誓つて貴様より、いゝ繪を書いて見せるぞ。文晁が何だ。おれだつてりつばな男だ。石にかちりついても、立派な繪師になつて見せるぞ」

と、怒鳴り／＼草雲はそこを飛び出して、川崎にある師匠の家にかへつた。

が、さすがに文晁は一代の師と仰がれただけあつて、かうした草雲の舉動をスツカリ物

蔭から見てゐた。

そしてすぐに一書をしたゝめて、金井烏洲といふ人のもとに寄せ、梅溪（草雲の當時の號）といふ奴はなか／＼いゝところのある青年だ、どうぞそのことを彼の師梅翁に傳へて彼を大切に指導してくれるやうに頼んでくれといつてやつた。

無論そんなことは草雲自身は知らなかつたが、文晁に與へられた侮辱は、そのとき以後彼を何かにつけて奮起させた。そして彼の技倆はぐん／＼伸びて行つた。

後年文晁のほんたうの心を知つた草雲は、金井烏洲に乞うて、そのときの文晁の手紙を貰ひうけ、りつばに表装して、それを自分の畫室にかけて拜んだといふことである。

文晁はやはりもつとも賢明な、草雲の隠れたる師であつた。

神の御魂

大日本は神の國なり
神器三はあれども

天照大御神こそ

かくはしも宣らし給ひぬ

「この鏡はもはら吾が御魂として吾が御前に拜くが如、齋きまつりたまへ」と
げにこそはいやとこしへに
天なるや神の御魂と
おほまへにいつきまつられ

いやさやに民億兆の

眞心をくまなく照らし

四方つ國山河草木

ひさかたの空行く雲も

とぶ鳥もありのことごと

ありのままその眞姿を

うつしつゝ光り輝く

御光は神ながらにして

天つ日の光と共に

おぎろなくとこしなへなり

げにやげにとこしなへに

大日本は神の國なり。

神の御子

都を遠きひむがしの
えみし屯す日高見の
海はろばろの朝ぼらけ
ほのぼの霞む波の上
天降りしが如くにも
現れ出でし御軍船。

あはやとあわてふためきて

海邊につどふえみしらの
目をくるめかす奇光
これぞ御船の舳なる
神の鏡のくすひかり
神の御稜威の光かも。

ををし御姿輝く劍

あはれ舳に立ちたまふは
いかなる人にてましますか
えみしはおそれかしこみて
かくこそ問へれえみしらは
かくこそ問ひてひれ伏しぬ。

日本武尊はも

うらく／＼昇る天つ日に

輝く太刀のそのごとく

御聲清しく嚴かに

たゞ一言をのたまひぬ

「吾はこれ神の御子なり」と。

ああたふとしやその御言

その一言の御言こそ

まこと日本の國民の

永久にたふとみかしくみて

仰ぎまつらむ光なれ

讃へまつらむ光なれ。

橋かけ爺さん

「温古の栞」、「近世越佐人物傳」、「北越名流遺芳」等、越後古今の有名な人物傳を集めた名著の殆んどいづれにも、「日光寺翁」といふ名の下に大體次のごとく誌されてゐる。

〔越後〕西頸城郡日光寺村の農、通稱彦右衛門といひ、天保年中の人。質朴にして忍耐に富み、若年より人の勞苦を救はんとはだて、在世七十二年間、農業の餘力をもつて最寄大小の橋梁を建設すること四百五十五ヶ所、道路を開き、あるひは改修すること百二十七ヶ所、社堂を建立すること十ヶ所、捨子を養育すること十六人に及びたりといふ。また敬神崇佛の念厚く、日本國中靈山勝地神社佛閣にして、參詣せざりしところほとんど無かりしといはる」

この讃歎すべき徳人、この偉大なる勤勞奉仕の先驅者日光寺翁の住んでゐた日光寺村といふのは、現在下早川村大字日光寺と呼ばれてゐる部落で、私の住んでゐる糸魚川町からわづかに二里足らずのところである。そして、その家は今なほ昔のまゝそこに榮えてゐる。當主は上野彦吉氏といひ、農を營んでゐる。

かの日光寺翁と呼ばれた篤行者は、今から五代前の金右衛門さんのことで、傳記者が彦右衛門としたのはその家の通稱によつたものであらう。金右衛門さんは安政六年九月三日に九十三歳の長壽をもつて世を去つた。

この金右衛門さんは、同村大字瀧川原の天池家から養子に來たもので、土地の人たちは「橋かけ爺さん」と呼んでゐたといふことであり、口碑ではこの爺さんは一生に八千八橋かけたとまで語り傳へてゐる。現在村役場の建てられてあるところのすぐ側の高臺に、古い大きな碑が立つてゐる。それにはかう書いてある。

願主 日光寺村上野彦右衛門

奉心願懸橋百五十三員、村里戮力、貴賤同心、既耐脩造功記。

于時文政二己卯十月吉日

これは全くなによりの證據である、文政二年には彦右衛門は五十三歳であつた。すなはち翁はすでに五十三歳までに百五十三箇所の架橋工事を成功してゐたのである。しかも村里戮力、貴賤心を同じくしてそれをやつたと明記してゐる。なんと貴い事實であらう。

翁の墓は日光寺本道の側の小高い共同墓地にある。二尺角の高さ三尺餘の墓石の面には「貫道橋翁居士」と刻まれ、側面に「安政六年九月三日、九年月辰年改」「願主孝子仍立、世話人赤澤」としてゐる。

これは文面からすると、後日改め建てられたもので、本當の墓は近くの草叢中にあるいとも小さな「貫道橋翁居士」と刻まれたのがそれである。そして翁の墓には毎年盂蘭盆に村中の人たちが今日なほ香花を手向けて供養しつゞけてゐるのである。

九十三年の永い生涯の、ほとんど全部を、架橋と道路改修等の勤勞奉仕で一貫して「橋かけ爺さん」とまで呼びならはされたこの日光寺翁の如きを、過去においてわれらの郷土のもち得たことを、私は大なる誇としたい。それとともにこの翁の偉徳の光輝を、特に今

の世に遍照させたく思ふ。

さらに深雪つもる冬期間、翁は雪が積ると澤山の葶藶（葶に作る爲皮をむいたあとの麻の莖）をもつて出て、それを山道や巖道などの要所々々の雪の上に立て、人々の道に迷はぬやうに道標としてやることにつとめた。冬仕事として竹で衣紋竿や乾物竿や魚串などを作り、それを附近の漁村の人々にくれて歩いた。そして、漁村の人たちが返禮として呉れる魚類を、山村の人たちにくれて歩いた。

さらに翁はひどくこども好きで、自分の屋敷に生つた梨でも柿でも、栗でも、みんな村中のこどもたちに頒ち與へ、こどもの喜ぶのを見ては自分もよろこんでゐた。

食物でも衣類でも、なんでもかんでも家に有り餘るものは、ことごとく困る人々に頒ち與へ、翁自身は常に粗食に甘んじ白い色をした餅などは生涯一度も口にしなかつた。

翁はまた老年期に入つてから裏の山地に新田の開墾をくはだてたが、その時は「今度こそ彦右衛門さんのために……」と村中總出で手傳ひをした爲、またゞく間に五反歩餘の立派な新田が出来あがつた。この田地は今なほその家の財産の一部となつてゐる。

法名貫道橋翁居士の通り、彦右衛門さんは「橋かけ爺さん」であり、「道なほし爺さん」であつたと同時に、人の心に道を開き橋を架け、美德の花を到る所に咲かせた「花咲爺さん」でもあつた。

めざめた一人の力は偉大である。一人のすぐれた徳は、やがて萬人の徳たるべきである。私たちはこの隠れた一人の徳を廣く世に傳へることによつて、やがて萬人の徳たらしめたものである。

一杯の蕎麥

噓かまことか、實話かつくり話かわからぬが、こんな面白い話がある。徳川時代に於ける代表的な大成金であつた、かの紀國屋文左衛門が、江戸中の有閑者達を尻目にかけて豪遊を極めてゐたころのことである。

ある日、日頃紀文の遊び仲間であり、かつある意味の競争者であつた某の許へ、紀國屋からの使がやつて来て、

「これはまことに軽少でござりますが、時節柄まことに珍らしい品と存じますので、こちら様のお旦那に差しあげていただきたいものと、手前主人からくれぐれもよろしくのこととでござります」

といふやうな甚だしく勿體振つた口上とともに、美しい容器に入れたなものかをさし出した。

取次のものがうやく／＼しく受取つて、早速それを主人のところに持つてゆくと、他ならぬ紀國屋文左衛門からの贈物と聞いて、主人の歡びは一通りでなく、とりあへず容器の蓋を取つて見ると、これはまた何たることぞ、中にはホンの一杯ほどの蕎麥しかないのであつた。

しかも、その蕎麥たるや、たゞの色の黒い、どこの蕎麥屋にでも腐るほどあるはずの蕎麥でしかなかつた。

彼はカツとなつた。いかになんでもあまり人を馬鹿にしすぎると思つた。それにはなにかいはれがあらうにしても高が一杯の蕎麥でしかない、こんなものをわざ／＼仰々しく持たせてよこすとは何事だとも思つた。そして、

「ようし、いまに見てをれ！」

彼は咄嗟の間にある一つの報復手段をさへ思ひついたのであつた。

彼は早速、番頭を呼んで命じた。

「お前に一つ取急いで取計らつて貰ひたいことがある。それは、これから店の者共に、それ／＼手分けして、江戸中で名の知れた蕎麥屋といふ蕎麥屋の打ちたての蕎麥を残らず買ひ集めさせて貰ふことだ。そしてそれを大八車に何臺でもいい／＼から積み上げて、木やり音頭も賑々しく紀國屋文左衛門さんの遊んでゐるところへ送り届けるやうにして貰ひたいのだ。」

番頭もあまりのことに、一時主人が氣でも狂つたのではないかと疑つたが、先刻からのいきさつを聞き、それが紀州あたりの山出しの成金風情に負けてゐてなるものかといふ江戸ツ子の立引からだと知るや、

「よろしうがす。さういふことならわつちだつて眞剣でさあ」

といつたぐあひに主人と一しよにのぼせ上つてしまつた。

やがて大番頭の命令一下、小番頭、大僧、小僧一人残らず勢込んで飛び出して行つた。

主人と大番頭とは胸をとらせて、彼等の復命を待ちかまへてゐた。

間もなく一人の小僧が、す／＼と歸つて來た。そして復命した。

「私のまゐりましたのは〇町の〇〇屋でござんしたが、そこではお生憎ですが、當分休業でございやすとのこと……」

と、さ／＼残念さうに小僧は頭を下げた。つゞいて小僧乙が戻つて來た。これも悄氣かへつて同様の復命をした。

丙も……

丁も……

戊も……

己も……

庚も……

辛も……

壬も……

癸も……

かくて使といふ使のことごとくが、異口同音に、

「蕎麥粉賣切れ、當分休業」といふ意外以上に意外の報告をもたらしたのであつた。

「して見ると、江戸中の蕎麥屋が、蕎麥粉の種切れから、一齊に休業中だ」といふわけだ」

かう嘆息した主人の顔には、全く名状しがたい失望の色があらはれた。とほとんど同時に、彼は「さすがは紀國屋だ！」と膝を打つて感嘆した。そして彼は今度は形を改めて大番頭に命するのであつた。

「おいお前、すまないが先刻、紀文さんからいたゞいたあの蕎麥をお佛壇にお供へしてくれないか」

何と高價な一杯の蕎麥よ。しかし、たゞ一杯の蕎麥を無類に高價たらしめるためにやつた紀國屋文左衛門のこの奇行は、果してこれ馬鹿げた豪遊氣分からだけであつたらうか。

この一つの昔話は、よしそれがつくり話であつたとしても、現時特に私に考へさせられるところ淺くはない。

曙覽と筍と虱

井手曙覽は越前福井の勤皇歌人である。文化九年（皇紀二四七二）に生れ、明治元年、（二五二八）に死んだ。福井市内の名門豪商の家の長男として生れたのであつたが、三十歳のとき志すところあつて、家業と家産を幣履のごとくすて去つて一切を異母弟に譲り自分は妻子とともに郊外足羽山に草庵を結び、清貧の一生を送つた。

銀あるなら四五百匁

無けりや百文でも

二百文でもちよつと

御かし

野 樸 長 者

曙 覽 貧 生

こんな手紙が残されてゐるが、これだけ見ても曙覽の人となりと生活の一斑がうかゞはれる。なほこんな歌がある。

米の泉なほ足らずけり歌をよみ文をつゞりて賣りありけども
たのしみはあき米櫃に米いで來今ひと月はよしといふ時
たのしみはまれに魚煮て兒等皆がうましといふて食ふ時
たのしみは錢なくなりてわびをるに人の來りて錢くれし時
たのしみは物を書かせて善き價惜みげもなく人のくれし時
たのしみはつねに好める焼豆腐うまく煮たてゝ食はせける時
たのしみはとほしきまゝに人集め酒飲み物を食へといふ時
たのしみはほしかりし物錢ふくろうちにかたむけて買ひ得たる時
たのしみは家内五人五たりが風だにひかでありかへる時

たのしみは機おりたてゝ新しきころもを縫ひて妻の着する時
等、曙覽の貧生活は、貧しさのうちに、常に朗らかさと楽しさをもつた、いかにもすが
くしい生活であつた。

かうした貧生活のうちに甘んじつゝ、曙覽は生涯國學を究め、歌を詠み、弟子たちを養
ふに努めた。藩主松平慶永（春嶽）さへ、彼を尊敬する餘り、ひそかに彼の陋居をおとづ
れ且人を介してなにかと教へを乞うた。

熱烈な勤皇思想の把持者として、また多くの勤皇家の師として、曙覽は天下有數の明治
維新の功勞者であつた。

勤皇家としての彼の歌、數首をこゝに掲げておかう。

たのしみは神の御國の民として神の教をうくるおもふ時

神國の神のをしへを千よろづの國にほどこそ神の國人

國の爲念ひ瘦つる腸を筆にそむとて吾世ふかしつ

正宗の太刀の刃よりも國のため鋭き筆の鋒揮ひ見む

國汚す奴あらばと大刀抜きて仇にもあらぬ壁に物いふ

天皇に身もたな知らず真心をつくしまつるが吾國の道

このやうな彼であつたがその生活ぶりは極めて脱俗的であつた。

縁の下に出た竹の子を伸ばしてやりたさに、縁に穴をあけ疊に穴をあけてやつたといふ良寛和尚の逸話はあまりによく知られてゐるが、曙覽にもこれとおなじ事實があつた。

曙覽は家が狭かつたので、縁先の地べたに藁を敷いて、そこへ机を持ち出して讀書や執筆をするのを常とした。

ところが、その大切な彼の書齋に、ある年の春、竹の子が芽を出した。曙覽は困つたなあと思ひながらも、それをそのまま伸ばしてやつた。竹の子はぐんぐ伸びて、つひには枝を出し、葉を繁らせた。曙覽はそれでも平氣であつた。そして、

壁くゞる竹に肩する窓のうち身じろぐたびにかれも枝振る

膝いるゝばかりもあらぬ艸の屋を竹にとられて身をすぼめをり

こんな歌さへ詠んで、むしろそれを樂んだ。

曙覽は又良寛和尚と同じく着物にたかつた虱を、平氣で繁殖するにまかせて面白がつてゐた。

着る物の縫目々々に子をひりて虱の神世始まりにけり

綿入の縫目に頭さしいれてちゞむ虱よわがおもふどち

やをら出てころものをくび匍ひありきわれに恥見する虱どもかな

これらの歌を讀んで誰か曙覽その人の洒脱さに驚かないものがあらう。最後に曙覽が子等に遺した最後の訓誡を紹介しておかう。

一、うそいふな。

一、物ほしがるな。

一、からだだわるな。

手向けの花

河内の弘川寺で西行上人の七百五十年遠忌が営まれると聞いて、古人を思ふ心更に新たなものあるを覚える。西行のやうな人を吾々の祖先の中に持つといふことは、とりもなほさずわが國民の歴史に限りなくゆかしい色彩と、汲めども盡きぬ情趣の存することになる。民族の祖先にいろ／＼な方面ですぐれた生涯を送つてその記録を子孫に遺して行つた人が多ければ多いほどその民族の歴史は多彩であり、その内容は豊富である。さうした歴史は民族そのものゝ生活内容であると共に、その民族に屬する個人々々の生活内容である。

西行上人は日本國民のものであると共に日本國民であるわれら個人々々のものである。心

外に西行上人を観る時、私はそれを拜まずにゐられぬが、これを自己心内に抱く時にわれらの永い過去がたまらなく懐かしく慕はしいものになる。

私は河内の弘川寺をおもひ、そこにある西行上人の墓をおもふと、いつまでも良寛さまが聯想される。良寛さまも芭蕉と同じく西行上人に對して限りない思慕を寄せてゐた人であつた。良寛さまが西行上人のお墓に詣でた時に詠んだ歌がある。

手折り來し花の色香はうすくともあはれみたまへ心ばかりは

良寛さまが西行上人のお墓に詣でた年代を私は寛政七、八年の頃と推定してゐる。今から百四十五、六年前のことである。

その頃良寛さまは三十八、九歳であつた。勤王の志を抱いてはる／＼越後から京に上つて居た父山本以南が、事志と違つて桂川に身を投じて死んだのは寛政七年七月二十五日であつた。良寛さまが永年修業してゐた備中玉島の圓通寺を去つて京に上り、そこから越後に歸つたのはその年かその翌年かであつたらしい。西行上人のお墓に詣でたのは、多分その旅の道すがらであつたらうと私は推定してゐるのである。